

此ノ被害達ヲ私暴者ニ思ツテ来タガ公判ヲ
見テ減刑歎願ト為ツテ来マシタ、モ一歩突
込マナケレバナラナイ此ノ結果ハ私共ノ仲間
ノ中カラ國民ニ對スル總懺悔期成會ヲ起
スニ至リマシタ

政黨政治ノ腐敗ノ原因ハ五十錢一圓ニ目シ
呉レルカラダ我々ハ議會政治ヲ否認スルモ
ノテハ無イ根本的ノ改革ハ必要トスルケレ
共選舉ニ當ツテ見テモ明治以來ノ官治組
織テ自治ヲ無クシタ精神が間違ツタ官治
ニ依ル自治ノ綱ヲ各村ニ起サナケレバナラナイ
奮イ起ス為メニ彼ノ五一五事件ヲ起スニ至ッ
タ原因アリ
彼ノ被害達ヲ出シタ原因モ一般農民ノ責任

デアール之ヲ全国的ニ懺悔シテ緩メ無キ運動
ヲ起サネバナラナイ

財政が非常ニ苦シイ為メニ必要ナ軍備サハ
出来ナイ全国民シ一致シテ事ヲ無ケレハ
二十億ノ豫算ハ堪ヘラレ無イテス

各村々ノ自治費ヤ國家ノ費用テ居ル官吏全
國テ百七方アリマスガ百姓ノ四倍カラ四倍半
掛ル生活費モ皆シテ税金テアル自治ノ農民ガ
現在ノ官治制度ニ依ツテ政治經濟文化總テハ
都會ハ集中サレタカラデアール

裁證

五一五事件ノ結果ニ依ツテ来タト云フノダネ
都會本位ノ為メテスガカラ我々ノ為メニ塩ヲ附ケテ
呉レタノテス共ル十月十五日シ期シテ畫
食ヲ抜キニシテ記名調印シタ者テ明治

神宮ニ参拜シマシタカニ千百五十人モアリマシタ必ズヤ大成業スル事デアリマス
新日本ヲ建設セナケレバチラナイト云フ根
強イ運動ハ根強イ中正的イ運動ト為
起ツタ
直接行動ニ對シテハ私ハ橋本ハ及對
意見ヲ持ツテ居リマシタガ此ノ五一五事件
シ斷ク為サシメタ事ハ此ノ社會ト民族ヲ護
展スルノガ自的ダツタノデアリマス

奥山并護人

并護人及被害ニ對シテ滿場感激シタ發言
ト思ヒマス夫レテ困ワテ陳情シタノハ長野
縣大ケダツタテセウカ又ハ全國ニモ有リマシ
タカ

證 農民協議會デ三十一件デアリマシテ台
灣朝鮮滿州等モ大体衰リハマリマセン
柏木弁護人

今ノ事ニ關聯シタ事デスカ殊ニ長野茨城
ハ東北千葉ヨリ酷イ其ノ原因ハ如何デヤ
ウカ

(以下次葉)

證

東北ハ土地が広イカラ何ントカナリマセウガ免ニ角金ヲ奉
位ニシタ社會 都會ヲ奉位ニシタ社會（單一農業組織）
カラ来テ困ルノテ政治的ナ改革ト相俟ツテ行カナケレバ
ナラナイガ長野 茨城ハ殊ニ酷ク全國的ニ困ツテ居ルノ
デアリマス。

政治上又選挙ニ就イテ見テモ私ノ附近ハ政民ノ甚シイ
處テ水田ニ対シテモ喧嘩スレバ及対依ノ小作人が取上げ
ラレル始末デス

宮下并護人

地方農村ノ救済事業ヲ起シテモ地方農民ノ依頼心ヲ
起スニ過ギヌノテセウカ

證

ソウデアリマス或ル村テハ駐在所査ヲ勤カシテ駐在所ヲ
造ルト言ウテ其ノ金ヲ飲ミ廻シタ事モアリマス

深作并護人

昨年七月ト思ヒマスガ長野縣ノ塩沢村テ食ヲ二圍ツ
テ盜伐ヲ行ツテ十人計リ檢禁ヲサレタ事實ヲ聞イテ
居リマスカ

證

理

聞イテ居リマス

上伊邦ノ上久形ノ全村テハ困ツテ組織的ニ公安林等
ヲ盜伐シタ事ヲ聞イテ居リマスカ

證

理

聞イテ居リマス

昨年長野縣下テ米塩ヲ盜ミシタ事ヲ聞イテ居リマスカ
ソウ云ウ事實莫モアリマス

裁

證

本日證人トシテ出ル事デアツタ上宇都茂ハ公務上出
テレナイカラ却下シマス

橋關係ニ就イテ昨日古賀ヲ調バタ所ニ依ルト古賀
ハ自分が橋、後藤ヲ介シテ西田暗殺ヲ教唆シタガ芝
公園テ後藤ト逢ツタ時古賀カ川崎ト面會シナイ

事ニ為ツタノハ後藤カラ言ヒ出シタモノデアルト云フ
表電所襲撃ハ橋ガヤルト云ツタト古賀ハ言ツテ居ル、又
首相官邸ト内大臣官邸ヲ襲撃ハ誰シタカ暗殺ノ案ハ
誰ニモ言ハナカッタト云フ

夫レカラ西田税、犬養首相ヲ狙撃ニ用ヒタピストルハ事
向カ出シタモノデ夫レハ三上カ良ク賞ヘテ居テ其ノ中一挺ノ
ピストルハ下ノ方ガ壊レテ居テ一発射テバ又直シテ射
タナケレバナラヌ様ニ為ツテ居タソウタ、大川ヨリハ二千円
古賀ガ受取ツタト云ツタ
時ニ午前十時五分 小憩ニ入り

午前十時二十五分雨止

奥山采護人

後テ古賀カ芝公園テ後藤ニ逢ツタ時万一川崎ガ捕マツ

テモピストルハ古賀カラ貰ツテ責任ハ一切古賀カ引受ケ
ルト云フ様ナ事ハ調書ニ御座イマセウカ
裁 皆調書ニアリマス夫レテハ之レテ結審ニシマスガ何カ御意

見ハ

江橋弁護人(證人申請ヲ論ゼレ概要)

證人ノ再申請ヲ願ヒ度イノデスカ證人申請書 記載中
ノ徳富猪一郎、稻村隆一、大井一哲、外 井上日召、四
名ヲ證人トシテ是非召喚セラレ度イノデアリマス此ノ事
件ノ生命ハ公訴事實ニモ無ク審理モ亦豫審事實ノ
復習ニ過ギナイカ被告ノ犯行ヲ為スニ至ツタ目的動機
原因ノ詳細ヲ盡スニハ公訴事實ヤ豫審事實ヲ以テ審
理スルヨリハ此ノ事件ニ密接ノ關係アル證人ヲ此ノ法廷ニ召
喚ノ上ニ於テ所謂其ノ證言ニ依ツテ審理ヲ希望シマス
ノテ右四名ヲ證人トシテ申請スル次第デアリマス

先少井上昭ヲ申請ノ理由トシテ井上ハ血盟団ノ被
告トシテ彼ハ事件組織上ヨリ見ルモ國家革新運
動ノ先覚者デアツテ所謂彼ノ主張スル無組織ノ
組織ト云フ主旨ヲ天下ニ圖カセ度イノデアリマス
彼ノ血盟団事件ハ共一五事件ト結ビ付クル所アリ
テ即チ井上ト橘カ昭和五年十二月廿五日福岡ノ
桎梏泉ヲ會ツシ事ヤ

以下次第

血盟團事件ト五、一五事件ハ組織ニ於テ同一テ即チ一人一
殺主義ヲツク事七年一月三十一日井上ガ本件被告ト権藤
成郷ノ空家デノ會合ト云ヒ

又井上ハ統制ノ任ヲ執ルト云ツク事モ古賀ノ豫審調書
ニモ表ハレテ居リマスガ即チ本件被告ハ皆井上、古内ノ感
化ヲ受ケタノデアツテ裁判上ハ別個ノ取扱ハ受ケテモ實体
上ハ同一ナリニアリマス

青山青年會館ノ會合ニシテモ亦堀川照沼川崎ガ護
國堂デ井上ニ會ツク事モ皆井上ノ感化ヲ受クルニ至ツク
ノデアリマス 橋以下ハ古賀ノ勸誘ナク共井上ノ人格ニ魅マ
ラレ感化サレテ居タ次第デ井上ノ抱懐スル思想ヲ此法廷
ニ聽ク事ハ必要ナ證言ト考ヘ申請スル理由デアリマス
又大井一哲ヲ申請理由ハ彼ノ著書ヲ被告ガ讀ムテ國
家革新ニ進ムヘク大イニ刺激セラレタ事ハ事實デ之亦申

請スル理由トスル處

尚徳富先生ニハ天下ノ文豪ニシテ其著書亦多ク社會改
造或ハ國民覺醒ニ關スル著書ニシテ内容ハ文筆ヲ以テ社
會ノ表裏ヲ遺憾ナク喝破セル人格者テ國民一般ノ崇
拝スル處先生ヲシテ此ノ法廷ニ起テ政治思想道德等ニ
對スル忌憚ナク説ヲ兼リ且ツ天下ニ之ヲ警告トシ度ク
申請スル理由デアリマス（此時深作年護人ヨリ簡單ニ
ト注意アリ）佐郷屋ノ判決ヲ見ヌレテモ重ク對シ五ノ
五事件海軍側被告ノ判決ハ輕イ之レ即チ目的動機
原因ニ依ルモノテ私ハ本件ハ無罪ヲ主張スル者デアリマ
スケレ共又公判廷ヲ通シテ世間ヲ騒ガセル事ヲ望ム者デ
アリマセン既ニ却下ニ為ツタノデアリマスガ以上述ベ
ムレテ理由デ右四人ヲ證人トシテ申請シ召喚ヲ願ヒ度
イノデアリマス

裁

檢事ノ意見ハ如何デスカ

檢

證人トシテハ既ニ述マシテ通りカカラ盡シテ居ル依ツテ喚問ノ必要ハ無イト認メマス

裁

テハ合議シマス

時ニ零時十五分裁判長並ニ陪席判事退廷シタルモ約二分間ノ后入廷シ

裁

テハ決定シマス何レモ必要ハ無イト認メマス

深作并護人ハ自席ヨリ起チ「橋氏ハ或ル人ハ八方塞リノ人ノ様ニ見ラレテ后リマシタガ建設ノ方ニモ意見ヲ持ツシ人デアル事ハ此ノ著書デア見ラレマス」トテ橋被告ノ著書七冊ニ證據説明書ヲ附シ「此中一冊ハ同一ノモノニ作檢事局ヘト述ベテ」廷下ラシテ取次ヲ提出シ石川并護人ヨリハ茨城新聞ヲ證據トシテ同一ノ提出アリタル后次回ハ併審ヲ以テ來ル三十日午前九時ヨリ開廷シ檢事ノ論告アル旨ヲ宣シテ午后零時二十五分無事閉廷トナレリ

右及申(通)報候也



特高秘第五九五〇號

昭和八年十一月三十日

警視總監藤沼

局保警
8.12. 4月
保平 号

寫

內務大臣山本達雄殿
各廳府縣長官殿

五一五事件民間側公判狀況、件

(第二十四報)

本日東京地方裁判所陪審第一種法廷ニ於テ
此標記第二十四回公判(檢事論告求刑)狀況左
記ノ通リ

記

一日

時

十

月三十日

自午前九時五十分

三四四

一場 所前田二全

一裁判長以下係判檢事 今

一被 告 二十名(橋孝三郎外十六名及大川、頭山)

本間

一辯護人 (本日出席者)

石川 淺 星野民雄

森田重次郎 龜山 要

植田亥之吉 官下 巖

今村力三郎 寺崎勝治

林 逸 郎 中川孝太郎

横田隼雄 金石一雄

鴉澤聰明 若井孝太郎

關口心吉 遠藤榮三郎

藤沼 光 池田謙太郎

杉浦武雄

柏木五百次郎

稻木鏡之助

角岡知良

岡田庄作

平松市藏

池田 操

栗原寧之助

岩松孝雄

深作貞治

花井 忠

宇都宮良久

伊藤 清

山口興八郎

卜部喜太郎

鈴木多人

前川盈一郎

木村半之助

瀨崎由太郎
 岡田八郎
 山本唯次
 竹内金太郎
 木下好太郎
 福田虎藏
 太田耕造
 栗田弘

(以上四十五名)

一 傍聽人

特別傍聽人

四名

一般 人

六名

家族近親者

三名

(外ニ裁判所職負

一名

二 一般狀況

警戒狀況從前ノ通りニシテ何等事故無シ

三 公判狀況

八 裁判長以下係判檢事ハ正午前九時出廷

九 辯護士並新聞記者七名下開廷前ニ入廷ス

十 今五分愛郷塾頭橘孝三郎ノ先頭ニ大川頭

山、木間ノ殿トシテ被告二十名（全部）入廷

着席ス

4、之卜前後シテ傍聴人ノ入廷シ終ル

此ノ間各新聞社ノ写真班ノ撮影アリ

合八分裁判長ハ開廷シ宜シ檢事ノ發言シ促

シ被告ヲ起立セシメタリ

ク此ノ時一二并護士ヨリ減刑嘆願書ノ提出シ為

シタリ

ノ木内檢事ハ自席ニ起チテ裁判長ニ對シ被告

ノ着席方ヲ促シ之ヲ着席セシメテ部厚ノ草案ニ

（別添写）シキニシテ之ヨリ本件ノ控訴事實ニ

付テ意見見シ開陳シマスト冒頭シ滔々論告

シ進メ合十時四十分一先ツ休憩ニ入りタリ

又合十一時再開更ニ合檢事ノ論告ヲ續行別

記ノ通り求刑シ為シ今十一時五十分開廷シタ
リ

10以上ノ如クニシテ傍聴席ハ満員ノ状況シ呈シ
相當緊張シタル場面シ見セタリ

11次回八月二十五日午前九時開廷ノ筈ニシテ
橋孝二郎一派ノ辯論ヨリ引續キ從前同様
毎週火、木、土ニ且リ開廷ノ豫定

12主ナル傍聴人

秦憲兵司令官、

平泉文學博士、

改元東京控訴院檢事、

山本海軍法務官、

潮見海軍法務官、

白井皇宮警察部長、

鶴見祐輔、

風見代議士

右及申(通)報候也

第 一 章	第 二 章	第 三 章	第 四 章	第 五 章
第 一 節	第 一 節	第 一 節	第 一 節	第 一 節
第 二 節	第 二 節	第 二 節	第 二 節	第 二 節
第 三 節	第 三 節	第 三 節	第 三 節	第 三 節
第 四 節	第 四 節	第 四 節	第 四 節	第 四 節
第 五 節	第 五 節	第 五 節	第 五 節	第 五 節

目 次

總論
 所謂五、一五事件
 本件、經路、社會的影響
 本件、經路、並其、顛末
 本件、經路、並其、目的
 事實關係
 大川周助、井上昭、橋孝三郎等、思想、
 本件、事犯、及、未、シ、ル、影響
 軍人、側、被、告、人、ト、常、人、被、告、人、ト、ノ、關係
 常、人、被、告、人、ト、相、互、ノ、關、係
 被、告、人、各、個、ノ、合、擔、シ、タ、ル、行、為、ト、之、ニ、對、ス、ル
 證據
 情、狀、論
 被、告、人、等、ノ、親、タ、ル、現、下、ノ、國、情、並、其、ノ、心、情
 之、ニ、對、ス、ル、批、判
 本、件、事、犯、ト、國、法
 法律、適、用
 本、件、事、犯、ト、內、亂、罪、ト、ノ、關、係
 本、件、事、犯、ト、判、亂、罪、ト、ノ、關、係
 本、件、事、犯、ト、適、用、ス、ル、法、條
 被、告、人、各、個、ノ、犯、情、ト、求、刑

第一節
第二節

被告人各個人犯情

愛郷塾頭橋孝三郎等爆發物取掃罰則違反
殺人及殺人未遂被告事件(五一五事件)
論告概要

緒言
之レヨリ本件公訴事實ニ付キ意見ヲ開陳致シマス

第一章 總論

第一節 所謂五一五事件

昭和七年五月十五日午後五時三十分頃陸海軍、制服を着用シタル十数名、以て壯軍人カ各手分シテ、官邸政友會本部警視廳、日本銀行等ヲ襲撃シ首相官邸ニ於テハ犬養首相並同首相護衛、為同邸内ニ詰メ居リタル田中平山西並査ソ拳銃一ニ祖撃シ各重傷ヲ興、其結果犬養首相及田中並査ノ兩名ヲ死スルニ至ラシ、且大臣官邸ニ於テハ手榴彈ヲ投擲シ裂ケ、且同邸ニ居リタル橋井進査ソ拳銃ニテ祖撃シ重傷ヲ加ヘ、警視廳ニ於テモ亦手榴彈ヲ投擲シ裂ケ、且同邸ニ居リタル長谷部察書記並高橋讀貴新聞記者シテ且同邸ニ居リタル祖撃シ各重傷ヲ興、更ニ此會本部日本銀行等ニ於テハ手榴彈ヲ投擲シ裂ケ、此重大事件ニ相次テ同夕刻一暴漢カ三菱銀行ヲ襲撃シテ手榴彈ヲ投擲シ裂ケ、又他、一隊ハ各手分シテ東京電燈株

式會社、渡橋、菱電所、外敷ケ、所、菱電所、テ、手、榴彈、ヲ、投擲、シ、以、テ、帝、都、ノ、暗、黒、化、シ、因、リ、又、他、面、ニ、於、テ、ハ、既、ニ、檢、舉、取、調、中、ノ、井、上、日、石、事、井、上、昭、一、黨、ノ、所、謂、血、盟、團、事、件、ノ、際、ニ、既、ニ、擧、尊、ニ、止、リ、居、リ、タル、西、田、稅、方、ニ、川、崎、長、光、ナル、者、兼、込、ミ、西、田、ヲ、拳、銃、ニ、テ、狙、撃、シ、重、傷、シ、興、へ、逃、走、シ、タル、事、件、ガ、發、生、シ、マ、シ、タ、所、謂、五、一、五、事、件、ノ、大、体、ヲ、筋、ハ、以、上、ノ、通、リ、テ、ア、リ、マ、ス

(以下次集)

第二節 本件事犯の社會的影響

本件事犯の勃發ハ實ニ青天ノ霹靂ニシテ軍服着用ノ陸海軍人ノ從黨ノ徂々白昼首相官邸ニ亂入シ一國ノ首相ヲ暗殺シ且各方面ノ襲撃ヲ爲ス如キハ事案極メテ重大ナル而已ナラス殊ニ當時ハ血盟事件檢擧直後ニシテ國民ノ腦裡不安ノ念未タ全ク去ラス而シテ事犯發生ノ原因並計劃ノ全貌詳ナラス如何ナル重大事犯續發スルハ豫測ヲ許サザル狀態ニ在リタル以テ其間然多ノ流言蜚語頻リニ起リ爲ニ一般國民ハ治安ノ維持ヲ付危懼ノ念ヲ抱クニ至リ甚クシク不安狀態ニ陥ツタノヲアリマス

殊一國政務ノ中樞タル首相官邸ニ白昼軍服着用ノ陸海軍人ヲ黨ヲ組シテ手榴彈拳銃等ヲ執ツテ固入シ上御一人ノ御信任ヲ辱ウシ國政變遷ノ大任ニ在ル首相ヲ暗殺スルカ如キハ空前ノ不祥事ト謂フベク其ノ結果政變ヲ惹起スルニ至ランメタルハ我憲政史上一大汚臭ヲ印シタルモノニシテ又畏クモ上御一人ノ宸襟ヲ惱マシ奉リシコトハ洵ニ恐懼惜ク能ハサル次第ヲアリマス

第三節 檢擧ノ経路並其ノ顛末

本件事犯ハ前述ノ如ク其ノ社會ニ及ボシタル影響極メテ重大ニシテ事態容易ナラス之ガ檢擧亦迅速且徹底ヲ期スル要アリ事件ノ發生ト同時ニ警

視廳之督勵之銳意事件ノ真相發見ニ努カシタリテアリマス

(一) 古賀清志等海軍青年將校六名、後藤映範等陸軍士官候補生十一名及元陸軍士官候補生池松武志等ハ、各其ノ合祖セル犯行ヲ遂行シ、上相前後シテ東京憲兵隊本部ニ自首シタル為、是等ノ檢擧ハ比較的容易ニ行ハレ海軍將校六名ハ東京軍法會議ニ、陸軍士官候補生十一名及池松武志ハ第一師團軍法會議ニ夫々送致セラシクテアリマス

(二) 古賀清志等陸海軍各人カ東京憲兵隊本部ニ自首直後、為シタル陳述ニ依リ、自首者以外ニ尚明治大學學生奥田秀夫ナル者本件ニ関與シ、單身三菱銀行ノ襲撃ヲ決行シタルコト判明シタルモ、襲撃ニ至リテハ其ノ計劃又犯人並陸海軍各人一派トノ連絡ノ有無未ク明カナラサル際、當夜(昭和七年五月十五日午後十時頃)偶々代々幡警察署(現代々木警察署)ヨリ同署管内居住西田税ノ川崎長光ナル者ハ井上昭一黨所謂血盟團ノ殘党ナルコト、及井上昭一黨ト古賀清志等海軍青年將校トハ從來國家革新運動ニ作互ニ相策謀シ、同志ノ關係ニ在リタルコトハ曩ノ血盟團事件ノ捜査ニ依リ既ニ判明シタリタルカ故ニ、血盟團ノ殘党川崎々西田々祖擊スル以上、此ノ祖擊ハ勿論襲撃電報ノ襲撃ニ亦、古賀等ノ首相官邸等ノ襲撃ト、何等カノ連絡アルニ非スマ

トノ推測ヲ下シ得タルニアリマス

茲ニ於テ更ニ捜査ノ計劃ヲ立テ警視庁ノ機敏ナル活動ト相俟テ事犯決
行ノ翌日即チ五月十六日未明ニ早クモ川崎長光ヲ芝區本芝二丁目
ニ一番地沖ノ史請負業新村三男方ニ於テ逮捕シ同時ニ同所ニ潜伏
シ居リタル愛御塾生大母貞明幹ヲモ亦之ヲ引致スルコトヲ得タルニアリマ
ス

此ノ兩名ノ取調ニ依リ川崎ノ西田祖擊ハ古賀等トノ連絡ノ下ニ行ハレ且
麦電所襲撃ヲ相當シタル者ハ愛御塾頭橋孝三郎ニシテ囚人ガ其ノ
配下ノ塾生等ヲ率ヒ古賀等ノ計畫ニ参加シタル事實明瞭トナリタルヲ
以テ其後引續キ是等既ニ逃走シタル犯人ノ逮捕ニ努カシ同月(昭和七年
五月)二十四日迄ニ橋ヲ除キ麦電所襲撃及西田祖擊ノ直接關係者並
三菱銀行ヲ襲撃シタル奥田秀夫等全部ノ逮捕ヲ得タルニアリマス

(三) 麦電所襲撃ノ首魁橋幸三郎ハ本件事犯決行前五月十二日既ニ春田信
義ヲ伴ヒ滿洲ニ遁避シタルコト判明シ追跡ノ上新京ノ隱家ニ於テ同伴者
春田ヲ逮捕シタルガ其ノ際橋ハ巧ニ警官ノ眼ヲ掠メテ逃走シ所在ヲ報
晦シタルニアリマス

然ルニ同人ハ自己が率ヒテ襲撃計劃ニ参加セシメタル配下ノ塾生等
カ全部逮捕セラレタルヲ知り獨り自ラ身ノ安泰ヲ計ルニ得サルニ至リ昭和七
年七月二十四日哈爾濱駐在憲兵隊ニ出頭シ同月三十日東京憲兵隊ニ押送
セラレ同日警視廳ニ於テ其ノ身柄ノ引渡ヲ受ケタノテアリマス

(四) 次ニ奥田ノ取調中 大川周明ガ本件事犯決行ニ在資金ヲ提供シ居ル疑アル
コトヲ推知シ當時横須賀海軍刑務所收容中ノ古賀中村ノ両中尉ヲ取調
ヘタル結果茲ニ大川カ本件事犯決行ノ用ニ供シタル資金並拳銃ヲ古賀ニ提
供シタル事實判明スルニ至ツタノテアリマス

大川ノ檢舉ニ在テハ特ニ苦心ヲ重ネ同年六月十五日夜上野発青森行列車内
ニ於テ同人ヲ逮捕スルニトシ得マシタ

(五) 尚古賀中村西中尉ノ取調中本間憲一郎頭山秀三ノ兩名ガ本件事犯決
行ノ爲古賀等一派ニ拳銃ヲ提供シタル事實ヲ確認シ先ツ本間ヲ檢舉ヤント
シタル處同人ハ既ニ所在ヲ晦マシ居リ同年九月十八日ニ至リ漸ク逮捕スルコ
トカ出来タ様ナ次第テアリマス

而シテ本間ノ取調ニ依リ頭山ノ罪状愈々明確トナリ同年十一月五日ニ同人ヲ
モ逮捕スルニ至リ茲ニ本件事犯ニ關係シタル民間側ノ犯人全部ヲ逮捕シ盡ス

エトヲ得タノテアリマス

(六) 次ニ池松武志ハ元陸軍士官候補生タリシ關係上後藤映範等陸軍士官候補生ト
同一行動ヲ執リタル爲陸軍々法會議ニ於テ勾留取調中ノ處同年七月十八日ニ
至リ同軍法會議ヨリ移送ヲ受ケタノテアリマス

(七) 夏雷所襲撃ニ参加シタル愛御野生温水秀則ハ豫審中病ニ罹リ昭和七年十二月
一月死シシ同人ノ公訴確ハ之ニ依ツテ消滅シタノテアリマス

(八) 本件事犯ハ前述ノ如ク陸海軍又並民間側被告人ノ三者合流シテ爲レタルモノ
ナルガ故ニ裁判管轄ニ於テ元海軍側被告人ハ海軍々法會議ニ陸軍側被告人ハ
陸軍々法會議ニ民間側被告人ハ當裁判所ニ夫々分レテ繫屬スルコトナリ罪
名亦陸海軍々法會議ニ於テハ叛亂罪當裁判所ニ於テハ爆発物取締罰則違反殺
人及殺人未遂罪トシテ審理ヲ進メラル、コトニ相成リマシタカ之ハ法制上已
ムヲ得サル處テアリマシテ當檢察局並當裁判所ノ豫審ト陸海軍々法會議ノ檢
察當否並豫審トノ間ニ於テハ相互ニ良ク協調連絡ヲ保テ十分ニ搜查審理ヲ遂
ケ事犯ノ全貌ヲ明白ニスルコトヲ得マシシコトハ當職ノ詢ニ欣幸トスル處テ
アリマス

(九) 其後陸軍々法會議ニ於テハ昭和八年八月十九日ニ檢察官ノ報告同年九月十九

日ニ判決言渡アリ海軍々法會議ニ於テハ同年九月十一日檢察官ノ論告同年十一月九日ニ判決言渡アリ孰シモ有罪判決確定シ残ル處ハ省裁判所ニ繫屬スル民間側被告人ニ對スル裁判ノミトナラテ居ル様ナ次第アリマス

第四節 本件事犯ノ遠因 動機 並其ノ目的

被告人等カ本件事犯ヲ決行スルニ至リタル遠因 並其ノ動機トシテ當裁判廷ニ於テ縷々陳述シタル處ヲ要約スレハ其ノ遠因ハ被告人等ノ所謂三月事件 並十月事件ニ端ヲ發シ支配階級タル政黨財閥 並特權階級相結託シ私利私慾ノミニ没頭シ國政ヲ紊リ為ニ事毎ニ國策ヲ誤リ外ニ於テハ外交ニ失敗シ内ニ於テハ國家存立ノ本ヲ為ス農村ノ疲弊トテ捨テ顧ミズ延テハ國民思想ノ惡化ヲ馴致シ國家ノ現状ハ今々思想ノ動搖 經濟ノ逼迫 外交ノ不振 其ノ極ニ達シ此ノ任ニ放置スルトキハ國家ノ存立ニ危ウスルニ至リ而カモ現下ノ狀勢ハ寸刻ニ猶豫ヲ許サス而シテ之レヲ匡救ノ途ヲ講スルニハ因循姑息ナル合法手段ヲ以テシテハ到底其ノ急ニ應ズル能ハスト為レ只一途支配階級タル政黨財閥 並特權階級ニ對シ非合法手段タル直接行動ニ依リ一舉革新ノ烽火ヲ揚クルノ外ナシト思惟シ本件事犯ヲ決行シタト謂フニ在ルノテアリマス

而シテ其ノ目的トスル處ハ被告人ニ依リ多少相遠シ軍人側被告人ノ如ク
非常手段タル直接行動ヲ敢行スルコトニ依リ帝都ヲ混乱ニ陥レ我嚴令
ノ宣布ヲ待テ軍部中心内閣ヲ成シメレモ政黨賊閥並特權階級ノ覺醒ヲ
但シ挙國一致國難ニ當リ國威ノ發揚ヲ期セントシタルモノモアリ橋本三郎一
派ノ如ク軍部獨裁ニハ反對ナルモ非常手段タル直接行動ヲ決行スルコトニヨ
リ政黨賊閥特權階級ハ勿論一般國民ノ覺醒ヲ但シ國家ノ革新ヲ期
セントシタルモノモアリモスルカ窮極ノ目的ハ國家ノ現状ニ不滿ヲ抱キ其ノ打
倒ヲ圖リ之カ革新ヲ期スルニ在リテ此ノ點ニ於テハ皆其ノ軌ヲ一ニシテ居ルノテ
アリマス

第五節 本件事犯ノ計劃内容

被告人等カ前述ノ如キ原因動機ニ基キ國家革新ノ目的遂行ノ為ニ敢
行シタル本件事犯ノ計劃内容ハ陸海軍ニ法會議並當裁判所ノ審理ニ依
リ既ニ証明セラレタルヲ以テ今茲ニ縷説ノ要ナキモ本論旨ヲ進ムル便宜
上一應簡單ニ申述ヘテ見タイト思ヒマス

本件事犯ハ井上昭一黨カ一人一殺主義ノ下ニ政黨賊閥並特權階級ノ代

表者暗殺ノ計画ヲ立テ昭和七年二月九日同志小沼正カ井上準之助ヲ
同年三月五日菱沼五郎カ團琢磨ヲ孰レモ暗殺シタル所謂血盟團
事件ノ後ヲ兼ケ其ノ同志シル古賀清志等海軍三年新校之シカ
中心トナリ後藤映範等陸軍士官候補生池松武志奥田秀夫及橋孝
三郎ノ率ユル愛御塾一派堀川秀雄ヲ中心トスル血盟團ノ殘党之レニ合
流シ敢行スルニ至リタルモノニシテ古賀中尉西中尉ハ總指揮ノ任ニ當リ昭
和七年三月中旬頃以來茨城縣土浦町料亭山水園ヲ根據トシ同所其ノ他ニ
於テ陸軍士官候補生側代表池松武志學生側奥田秀夫愛御塾關係者
橋孝三郎後藤園彦等ト屢ニ會合謀議シ凝ラシ初ハ同年五月下旬
召集セラルヘキ特別會議開會中ニシテ襲撃スル計劃ヲ立テタルモ同
志シル陸軍士官候補生ノ大部分カ滿洲見學旅行並富士裾野演習ノ為
參加不能ナル事情明カトナリ一旦右計劃ヲ拋棄シ更ニ種々謀議ノ末同年
五月十三日ニ至リ漸ク一ノ成案ヲ得之レニ基キ本件事犯決行トテツクノテア
リヌ

最後ニ確定シタル本件襲撃計劃ノ内容ハ即チ其決行日ハ昭和七年五月
十五日武器ハ同志海軍中尉三上卓カ上海出征中入手シタル手榴彈ニ

十個、海軍少尉伊藤龜城カ同シノ上海出征中入手シタル手榴彈一個
吉賀中尉カ大川周朋ヨリ受取りタル拳銃五挺頭山秀三本間憲一郎
ノ兩名ヨリ貰ヒ受ケタル拳銃六挺及海軍少尉村上格之ノ拳銃二挺ヲ加ヘタ
ルモノニシテ軍人側ハ吉賀等海軍青年將校六名後藤映範等陸軍士
官候補生十一名及池田武志ノ十八名三班ニ分レ第一班ハ首相官邸第二班ハ
内大臣官邸第三班ハ政友會本部ノ襲撃ヲ担当シ各自担当ノ襲撃決
行後合流シテ更ニ警視廳ヲ襲撃シ然ル後東京憲兵隊本部ニ自首スル
トト第一班首相官邸表門組ハ三上中尉外四名裏門組ハ山本中尉外三名
集合場所靖國神社境過第二班内大臣官邸組ハ吉賀中尉外四名集
合場所泉岳寺境内第三班政友會本部組ハ中村中尉外三名集合場所
新橋駅構内トシ同日午後五時半ヲ期シ一斉ニ各部署ニ就クニト首相
相官邸ニ於テハ犬養首相ヲ内大臣官邸ニ於テハ牧野内大臣ヲ暗殺シ
尚之レヲ阻止スル者ハ射殺スルニト奥田秀夫ハ同時ニ三菱銀行ヲ襲撃シ
橋本三郎ノ率ユル愛御塾生等ハ午後七時ヲ期シテ一斉ニ東電電産
電所外五ヶ所ノ変電所ヲ襲撃シ川崎長光ハ同時刻頃西田税方ニ到リ
同ノ暗殺スルト謂フニ在リテアリマス

西田税暗殺シ本件計劃ニ加ヘタル事情ハ元來井上昭一黨並古賀等海
軍側同志ハ西田カ陸軍少壯將校ノ間ニ相當ノ勢力ヲ有スルモノト思惟
シ居リタル關係上被告人等ノ所謂十月事件前ヨリ相携帶シ行動
シ共ニシ来リタル處同事件後西田ノ態度豹変シ其ノ言動往々曖昧
ナルモノアリ殊ニ古賀等カ本件事犯決行ノ計劃ヲ立ツルニ當リテハ西田ハ
時期尚早ヲ唱ヘテ之レニ参加ノ色ナキ而シテ古賀等カ後藤映範
等陸軍士官候補生ト連絡シ執リ本件計劃ヲ進ムルヲ見ルマ却テ
之ヲ阻止シ本計劃ノ決行ヲ妨害セントシタルモノ疑アリ焉古賀等ハ西
田ヲ同志ノ裏切者ト認メタルニ因ルノテアリマス
日本銀行襲撃ハ最後ノ計劃案中ニ含メシ居ラサリシ又當日第一
班村山少尉外三名ヲ豫定ノ犯罪遂行後遠カニ發意實行シタルモノ
ニシテ亦本件事犯ノ派生的產物トシテ包括的ニ觀察スヘキモノナルニ
トテ特ニ附言シテ置ク次第アリマス

第二章 事實關係

第一節 大川周明、井上昭、橋孝三郎等ノ思想ノ本件

事犯ニ及木止タル影響

本件事犯ニ對シ大川周明、井上昭、橋孝三郎等が與ヘタル思想的影響如何ト云フ莫ニウキ一應検討ノ要アリト認メス。

(一) 先少大川周明ニウケテハ

同人ノ公判廷立予審ニ於ケル供述ニ依レハ、同人ハ國家ノ精神生抗ノ自由、政治生活ノ平等、經濟生活ノ友愛ヲ理想トシ、尙來亞細ニ滿洲ト云玉トノ干係ノ重大性ニ鑑ミ之ヲ解決ニハ此理想ノ大務トシ先少維新ノ日本建設ノ要アリト爲シ、自ラ思想團所タル竹垣社、神武會ヲ主宰シ、且又東亞ノ調査研究機關タル東西經濟調査局ノ理事長トシテ其實權ヲ掌握シ、之ニ據リテ日本精神ノ鼓吹ニ努力シ來リタルコト茲ニ十數年、現下ノ

吾等情ハ合法手段ヲ以テテハ到底之ガ目的ヲ達成ス
ルコト能ハザルヨリ、之ガ達成ヲ期スルニハ非法手段タル
直接行動ニヨルノ外ナシトノ思想ヲ抱クニ至リ、爾來之
ガ其現ニ努力シ、輒近勅禁ニ來レル玉家革新ノ氣
運ヲ刺戟醸成セシメタル有力者ノ一人ニシテ、被告人等
ノ所謂三月事件並十月事件ニ際シテハ、樞要ナル地位
ヲ占メ、延テテ事件事犯殺生ノ氣運促進ニ與リテ力
ガアツタノデアリマス。更ニ此關係ヲ詳論スレバ古賀等海軍
側同志ハ海軍兵舎後在長村代ヨリ、先輩故海軍少佐
森井齊ノ指導ニ依リ玉家革新ノ思想ヲ抱クニ至リ
當時大川ノ干係ニ在リタル大學寮ニ出入シ、爾來同人
ノ玉家革新ノ思想ニ共鳴シ在リタルヲ以テ、事件計
画ヲ為スニ當リテ之、其思想的經過ニ於テ、大川ノ抱
懷セル思想ノ影響ヲ受ケタルコト論キキルニシテ、玉家
革新運動ニ於ケル大川ノ地位ハ、独其思想的方面ニ於
テ重キヲ為ス而已ナラス、被告人等ノ所謂三月事件並

十月事件ニ依リテ、示サレタルガ如ク、其実行力ニ於テ亦年々タルモノアルガ故ニ、大川ノ此実行の方面ノ威力ニ甚大ナル期待ヲ懸ケ、同人ヲ掌中ニ收ムト否トハ、目的ノ成否ニ重大ナル影響アリト確信シ、同人ノ援助ヲ乞フニ至ツタノデカリマス。

三 次ニ井上昭ニ付テハ

同人ハ予テ国家革新ニハ現状ヲ打破スルコトヲ以テ第一義トシ、破壊者ヲ建設迄モ所アルコトハ国家革新運動ノ精神的墮落ナリトノ思想ヲ抱キ、自ラ暴力的革新ノ担當者ヲ以テ任シ居タルモ、ニシテ、昭和五年中故海軍少佐井上齊ハ井上ト相識ルニ及ンデ同人ノ思想ニ共鳴シ、直ニ国家革新運動ノ同志トシテ相折スニ至リ、又古賀等海軍側ノ者ハ井上ヲ介シ井上ニ接スルニ及ビ井上ノ感化ヲ受ケ其一味トナリ謀議ノ末、井上服一黨カ一人一般主義ノ下ニ先ヅ發起シ、古賀等海軍側其後ヲ承ケテ第二段ニ集團的進歩的ニ出ツルコトノ計畫

ヲ立テ、曩ニ血盟団事件トナリ、次ニ本件事件トナリ、決行
トナリタルモノニシテ、本件事件は決行ニツイテハ井上昭ノ思
想的影響が最も重大且深刻ナリトコトハ一矢ノ疑ヲ容レ
ザル処デアリマス。

曰橋本三郎ニ付テハ

同人ハ持論トシテ所謂玉氏共同体王道主義ノ建設ヲ主
唱シ、農本主義ノ下ニ玉氏ハ互ニ兄弟妻ヲ以テ相提携シ
各自ノ天職使余ヲ果スベキモノナリトノ思想ヲ抱キ、自ラ
第一高等學校ヲ中途退學シテ、農ニ勉メ、妻郷會五妻
郷塾ヲ創設シ、其主義ノ宣伝ニ努メ、妻郷會五妻ノ一ニ
其抱懐セル思想ハ井上等ノ破壊思想トハ其ノ軌ヲ一ニ
セサル處アルモノ家業新ノ必要ヲ認メ之ヲ實現セント
スル熱情ニ至リテハ一脈相通スルモノアリ、互ニ相許シ、庶リ
タル為、配下ノ妻郷塾関係者ヲ率ヒ本件事件決行ニ
参加スルニ至ツタモノデアリマス。

(四) 更ニ此際一言附加シタキコトハ、此一輝ノ思想カ本件事件

ニ影響アリヤ否ヤノ矣デアリマス。

元来同人ハ本件事紀ニ直接關係ナキモ、同人ノ著書「日本
改造法案大綱」中ニ戒嚴令下ニ於テ国家改造ヲ断行ス
ベキヲトシ主張シ、国家革新運動ニ志ス者ノ間ニハ相當ノ
信奉者アリ、古賀等ノ陳述ニ依ルモ、同人等ガ本件事紀
ノ断行ニ依リ戒嚴令下ニ於テ軍部中心機關ヲ成立セ
シメ、国家改造ヲ断行セント企圖シタルコトハ明カニシテ、
此實ニ於テ此思想モ亦本件事紀ニ影響アリタルモノト謂
フベキデアリマス。

第二節 軍人側被告人ト常人被告人トノ關係

本件ノ取調ニ依リ判州シタル事實ヲ綜合スルニ元来海軍側
ハ故海軍少佐孫井齊ヲ中心トシ古賀靖志、三上卓、山岸
公其他ノ同志相集リ一團トナリ、国家革新ノ氣運醸
成ニ努メ、昭和五年中孫井カ井上取ト相識ルニ及ニテ
同人ノ一党、新滿血盟團ト號シ、一層国家革新ノ志ヲ

因ノ、尚陸軍青年將校ノ間ニ相當ノ地位ヲ有スルモノ
ト思惟セラレ居タル西田純下ニ連繫ヲ保テ、被殺人等ノ
新調三月事件並十月事件後、同志間ニ於テル玉家華
新運動ノ氣運一層濃厚トナル也、海軍側又亦井上一
トノ干係一層緊密ノ度ヲ加ヘ、昭和七年一月ニ至リ井上一
党ト合流シテ、独自ノ立場ニ於テ松石トナリ玉家華新ノ
烽火ヲ揚ゲント一決シ、先ヨリ井上一党ハ一人一殺主義ノ
下ニ政黨財成並特權階級ノ代表者暗殺ノ計畫ヲ立テ
同志小沢正ハ井上黨之物ヲ發起シ、其間海軍側ノ
中心人物タリシ津井齊ハ上海ニ出ルニシテ、古
賀、中村ノ兩中尉ハ當時被殺ケ捕虜ニ勤務シ、京都
近ク三所リタル干係上、津井ノ志ヲ継キ海軍側同志総括
權ノ任ニ當ルコトナリ、今年三月十一日井上昭カ警視
庁ニ留置セラレタル後ハ、主トシテ古賀カ中心トナリ暴走
（第一章第五節）説明シタルカ如ク茨城縣土浦所料亭

山水園等ニ於テ池松武志、奥田秀久、橋孝三郎、後藤園
彦等ト屢々會合謀議ヲ凝ラシ、本件事犯執行ノ計畫
ヲ進メテ未タノデ有リマス。海軍中尉三上卓、同山岸宏
同林正義、海軍少尉村山格之、同伊東龜城、同久走春
雄等ハ從来古賀等ト同郷、王家革新運動ノ同志ニシ
テ、該備海軍少尉定若勇ハ昭和二年一月、三上ト相識ル
ヤ其同志トナリ、孰シテ本件計畫ニ参加シタモノテアリ
マス。後藤映範等陸軍士官候補生ハ、古賀中尉ニ於テ
造メ國家革新運動ノ陸軍側同志タリシ陸軍歩兵中
尉安藤輝三等ニ對シ本件計畫ニ参加ヲ求メタルニ同
意ノ色ナキヲ見更ニ後藤映範等ニ参加ヲ求ムルニ及
ビ直ニ之ニ替同シタルモノ、池松武志ハ元陸軍士官候
補生ニシテ後藤映範等ト同志ノ干係上亦之ニ参加シ
海軍側ト陸軍士官候補生側トノ間ノ連絡ノ任ニ當リタ
ルモノデアリマス。奥田秀久ハ夙ニ井上一等ト交遊アリ
曩ニ勅殺シタル血盟團事件ニ干係アリタル間物ニシ

一、中... 二、... 三、... 四、... 五、... 六、... 七、... 八、... 九、... 十、... 十一、... 十二、... 十三、... 十四、... 十五、... 十六、... 十七、... 十八、... 十九、... 二十、... 二十一、... 二十二、... 二十三、... 二十四、... 二十五、... 二十六、... 二十七、... 二十八、... 二十九、... 三十、... 三十一、... 三十二、... 三十三、... 三十四、... 三十五、... 三十六、... 三十七、... 三十八、... 三十九、... 四十、... 四十一、... 四十二、... 四十三、... 四十四、... 四十五、... 四十六、... 四十七、... 四十八、... 四十九、... 五十、... 五十一、... 五十二、... 五十三、... 五十四、... 五十五、... 五十六、... 五十七、... 五十八、... 五十九、... 六十、... 六十一、... 六十二、... 六十三、... 六十四、... 六十五、... 六十六、... 六十七、... 六十八、... 六十九、... 七十、... 七十一、... 七十二、... 七十三、... 七十四、... 七十五、... 七十六、... 七十七、... 七十八、... 七十九、... 八十、... 八十一、... 八十二、... 八十三、... 八十四、... 八十五、... 八十六、... 八十七、... 八十八、... 八十九、... 九十、... 九十一、... 九十二、... 九十三、... 九十四、... 九十五、... 九十六、... 九十七、... 九十八、... 九十九、... 一百、...

助ヲ求メ同意ヲ得タモノデアリマス、頸山秀三、本間寛一
部ノ両氏ニツイテハ、本間ハ元来井上昭ノ盟友ニシテ同人
ノ警視廳ニ留置セラレ、迄約一ヶ月、頸山秀三ノ主宰
セル天行會道場内ニ隱匿シタルコトアリ、其間古賀、中
村等カ井上ト連絡ノ必要上、屢々同所ニ出入シ、頸山
及本間ト相識ルニ至リ、尚井上カ當揆事務局ニ出頭スル
際、頸山ニ古賀等ノ計画ヲ打聞ケ、之ヲ援助セシコトヲ
依頼シ置キタル爲、古賀等ノ援助申出テ答シ、頸山、先
ツ之ヲ承諾シ以テ同人ノ口添ニ依リ本間亦本件計
画ノ援助ヲ爲スニ至ツタモノデアリマス。

第三節

常人被告人相互、關係

二、三、一

民間側被告人、中心人物トシテハ先ツ第一ニ橋孝三郎ヲ擧ゲケレハナラナイノテアリマス

橋カ本件計畫ニ参加シタル事情ハ既ニ説明シタルカ如ク古賀守ノ勧誘ニ依ルモノナルカ古賀並橋等ノ供述ニ依ツテ見ルモ古賀等ノ期待シタル廠ハ橋一人ノ参加ニ在ルニ非スシテ同人ノ統率スル愛郷塾生ヲシテ實行部隊タラシメントスルニ在リ橋モ此ノ擧ニ賛成シ愛郷塾首腦者後藤園彦等ト協議、上塾生大貫明幹、矢吹正吾、高五百枝、小室カ也、横須賀喜久雄、春田信義、亡温水秀則等ヲシテ変電所襲撃ヲ相嘗マシムルコトニツタフテアリマス

從フテ是等塾生ノ参加ハ全ク橋ノ意思ニ依ルモノニシテ之レニ於テハ是等塾生ノ参加ハ實現セサリシモノト見ナケレハナラナイノテアリマス

右様十次第ニ是等ノ塾生ハ孰レモ橋乃至同人ノ代理者後藤園彦ノ指揮、如ク活動シタルモノテアリマス而シテ此ノ変電所襲撃ハ實ニ橋ノ担當ニ依リ襲撃個所ノ分担ノ如キモ橋ノ計畫指揮ニ依リ決定シタルテアリマス。後藤園彦、愛郷塾、首腦者、丸尾孫上橋ヨリ前述ノ如キ計畫ヲ打聞ケ参加ヲ求めラル、又直ニ之ニ同意シ爾來同人ノ

懐刀トシテ謀議ニ參與シ愛郷塾生等ヲシテ変電所襲撃ニ相當マシメタルノミナラ
ス之レカ決行ニ際シテハ橋ニ代リ其ノ指揮統制ニ當リタルモノテアリマス

林正三、本件計畫ニ參加シタル時期ハ後藤園彦ヨリハ少シク遅レ居ルモ林又亦愛郷
塾首魁者ノ地位ニ在リタル關係上本件計畫ニ參加シ後藤ト共ニ橋ヲ補佐シ事犯決
行ニ重要ナル役割ヲ演シルコトハ洵ニ明瞭テアリマス

高根沃典一ハ樞末愛郷塾トハ何等關係ナカリシモ塾生大員明幹トハ知合ナリシ爲
同人ヨリ勸誘ヲ受クルマ深キ思慮ヲモ拂ハス本件事犯決行ニ參加スルニ至ツタラテ
アリマス

川崎長光 堀川秀雄 照沼操 里沢金吉、四名ハ元々古賀等海軍側ト同志ノ關
係ニ在リタル爲メ本件計畫決行ニ付橋等ヨリ古賀ノ意ヲ傳ヘ參加ヲ求めラレ之レヲ
兼諾參加スルニ至ツタモノテアリマス

次ニ奥田秀夫 池松武志、兩名ハ既ニ説明シタルカ如ク古賀等海軍側乃至陸軍士官
候補生側トノ關係ニ於テ本件計畫ニ參加スルニ至リタルモノニシテ他ノ民間側被告人トノ
間ニ於テハ樞末深キ交渉カナクツタノテアリマス

大川周明 野山秀三 本間憲一郎、三名モ亦曩ニ説明シタルカ如ク古賀等海軍側ト
ノ關係ニ於テ本件計畫ニ援助ヲ興フル至リタルモノニシテ之レ亦他ノ民間側被告人トノ

間ニハ直接ニハ交渉連絡ヲナカツタ、テアリマス

二、三、二

第四節

被告人各個人ノ分担シタル行為ト之レニ対スル

證據

被告人各個人ノ分担シタル行為ハ豫審終結決定書記載ノ通りニシテ被告人等ハ孰レモ當公判廷ニ於テ之レヲ争ハサル處ナルヲ以テ簡單ニ其ノ概要ノミヲ申述フルニ止メマス

(一) 先ツ愛郷塾關係ニ付テハ

橘孝三郎ハ配下ノ塾生ヲ率ヒテ古賀等ノ計畫ニ加ハリ其ノ立案ニ参加シ殊ニ変電所襲撃ヲ担案シ愛郷塾生ヲレテ之レニ當ラシメ之レカ決行ニ付テ指揮統制ニ任シ且ツ古賀ノ依頼ヲ受ケ川崎ニ対シ西田 祝暗殺担当ヲ總通シ之レヲ承諾ヤシメ後藤 園彦 林正三ノ兩名ハ橘ヲ援ケテ本件計畫ニ参加シ且橘同様川崎ニ対シ西田ノ暗殺ヲ勸誘シ殊ニ後藤ハ橘ノ總参謀トシテ活躍シ橘カ決行前五月十一日退京シタル後ハ橘ニ代リ自ら変電所ノ襲撃ノ總指揮ノ任ニ當リ矢吹正吾ハ東電龜戸変電所 横須賀喜久雄ハ東電鶴ヶ谷変電所 亡温水秀則ハ東電淀橋変電所

大貫明幹 高根沢興一、西名ハ鬼怒川水ノ東京変電所ノ襲撃ヲ夫々担当
シ孰レモ其ノ担当シタル変電所構内ニ手榴彈ヲ投擲シ

塙五百枝ハ東電田端変電所ノ襲撃ヲ担当シタルカ單ニ変電所構内ノ水揚ホ
ンブ装置ノ一部ヲ破壊シタルニ止マリ手榴彈ヲ投擲スルニ至ラスシテ逃走シ

小室カ也ハ東電目白変電所ノ襲撃ヲ担当シ同変電所附近ニ到リタルモ
中途恐怖心ヲ生シ手榴彈ノ投擲ヲ中止逃走シ

春田信義ハ襲撃変電所ノ調査ヲ担当シ且同志ノ間ヲ往復シ之レカ連絡ノ
任ニ當リ

杉浦孝ハ本件計畫遂行ノ為後藤園彦林正三等ノ命ヲ受ケ同人等乃至
変電所襲撃担当ノ塾生川連絡ノ任ニ當タルモノテアリマス

二 次ニ奥田秀夫ハ古賀清志等ヲ援ケ襲撃目標タル首相官邸内大臣官邸等ノ調査ヲ
為シ且三菱銀行襲撃ヲ担当シ同銀行裏ニ手榴彈ヲ投擲炸裂セシメタルモノテアリ
マス

三 池松武志ハ後藤映菫等陸軍士官候補生ヲ代表シ古賀等海軍側トノ間ノ交渉ノ任ニ
當リ且古賀ヲ援ケ襲撃目標タル首相官邸内大臣官邸等ノ調査ヲ担当シ古賀等
ニ対シ種々重要ナル進言ヲ為シ決行當日ハ古賀ノ率ユル第二班ニ加ハリ内大臣官邸ニ於

テハ自ら手榴彈ヲ投擲シ警視廳ニ於テハ玄關先ニ居合ハセタル者等ニ對シ拳銃ヲ發射シタルニアリマス

二、三、三

(四) 川崎長老ハ西田暗殺ヲ相當シ同入ヲ拳銃ニテ狙撃シ同入ノ右側胸部外四ヶ所ニ治療的ニヶ月ヲ要シタル甚敷通並ニ有管銃創ヲ負ハシメタルニ殺害ノ目的ヲ遂ケナクツタモノテアリマス

(五) 坂川秀雄照沼探黒沢金吉、三名ハ最初川崎ト共ニ本件計畫ノ實行隊ニ加ハル謀定ナリシ処人員、都合上一時待機ヲ命セラレタル為第一線ニハ立たサリシモ古賀橋等ノ依頼ニヨリ川崎ニ對シ西田暗殺ヲ相當スルコトヲ勸説シ川崎ヲシテ之ヲ決行スルニ至ラシメタモノテアリマス

(六) 大川周明ハ古賀等ノ依頼ニヨリ本件計畫ニ賛成シ事犯決行ノ用ニ供スル為拳銃五挺資金六千円ヲ古賀等ニ提供シタルモノテアリマス

(七) 頭山三本阿憲一郎、兩名モ亦古賀等ノ依頼ニヨリ同シク本件計畫ニ賛成シ事犯決行ノ用ニ供スル為拳銃六挺ヲ古賀等ニ提供シタルモノテアリマス

(八) 以上カ審裁判所ニ繫属シ居ル被告人各個人各担シタル行為ニシテ且等ノ事實ハ被告人等カ孰シモ當公判廷ニ於テ認メ居レル而已ナラズ既ニ取調ハタル證據ニ依リ事犯洵ニ明白ナルヲ以テ其ノ證據說明ハ省署致シマス

第三章 情狀論

第一節 被告人等ノ觀タル現下ノ国情並其ノ心情

本件被告人等ハ異口同音ニ政黨財成並ニ特權階級相結託ニ權勢ヲ專ラシテ國政ヲ紊シ私利私慾ヲ圖リ國民福ヲ顧ミズ腐敗墮落ニ陥リタリト主張シ其ノ例證トシテ所謂昭和ノ五大疑獄事件、昭和六年末ノ弗ノ思惑買ト金輸出再禁止並倫敦海政ノ局ニ在ル者事毎ニ國策ヲ誤リ、外ニ於テハ外交ニ失敗シ内ニ於テハ不況ノ爲、疲弊セル農村ヲ捨テテ顧ミズ却ツテ之レカ疲弊ヲ助長セシメ今ヤ農村ハ全ク瀕死ノ狀態ニ在リ延ヒテハ國民思想ノ悪化ヲ馴致醸成セシムルニ至リ、現下ノ国情ハ各方面共全ク行詰リテ滅亡ノ例ニ立テ一日忽セニスベカラサル危急存亡ノ秋ニ遭遇シ居ルヲ以テ國民ハ須ラク之レガ匡救ノ策ヲ講ジ國家革新ニ努力セザルヘカラサルコトヲ強調シ如斯ク勢ナルニ不拘爲政者其ノ他支配階級ノ地位ニ在ルモノ莫ク之レニ顧念スルコトナク、徒ニ目前ノ權勢維持ニ努メ國民參政ノ機失タル帝

國議會ハ政權慾ニ燃ユル墮落政治家ト名譽慾ニ渴スル背徳議員ノ私市場ト化シ、名利ノ爲メニハ、國家ノ利害ヲ無視シ政敵ヲ殲ス爲ニハ國家ノ名譽、信用ヲモ顧ミズ、眞面目ニ國政ヲ議スル誠意ト資格トヲ缺ク者多ク彼等ノ手ニ、國政ヲ委ヌルハ國家衰亡ニ導クモノニシテ合法手段ヲ以テシテハ到底革正ノ實ヲ集ムルコト能ハス而カモ今ヤ内外共ニ事態ハ刻々逼迫シ、寸刻ノ猶豫ヲ許ササル危機ニ直面シ居レルヲ以テ、憂國ノ至情傍觀スルニ忍ビズバムヲ得ス自ラ捨石トナリ國家革新ノ烽火ヲ揚ケ非常手段タル直接行動ニ出ツルニ至リタルモノナルコトヲ痛論シテ居ルノテアリマス

第二節 之レニ對スル批判

被告人等カ主張スル如ク、所謂昭和ノ五大疑獄事件其ノ他陸續トシテ現ハレタル大小ノ疑獄事件、又ハ政黨ヲ背景トシ或ハ政黨人ニ關係アル醜事實ナリトシテ幾多ノ事實ガ其ノ當時日帝新聞紙等ニ依リ喧傳セラレタル爲、之レヨリ推シテ政黨者流ノ腐敗墮落甚ニト爲シテ憤激ニ且財界ニ於テモ私利私慾ニ惠念シテ國利民福ヲ思ハス甚ニキハ、國ヲ賣ルモ尙意ニ介セサルカ如キ一部財閥者流ヲ

リトシ、其ノ背徳行為ヲ非難スル世論囂々タルモノアリシヨリ、被
告人等カ之レニ多大ノ衝動ヲ受ケタルコトハ必ズシモ無理カラヌ処ト
思フノデアリマス、而シテ他面本件事犯決行當時ノ我国情ハ農村ノ窮
乏都市小中商工業者ノ困窮、思想ノ悪化國際關係ノ急迫等幾多
憂慮スベキ事態アリテ内外共ニ一大難局ニ当面セルヲ以テ此ノ難局打
完ノ方途ヲ講セサルヘカラストノ信念ヲ抱クハ國民トシテ当然ノコトテ
アリマシテ被告人等ガ思フ茲ニ致シタルハ深ク諒トスルモ其ノ執ル
ヘキ手段ヲ設リタルコトハ洵ニ遺憾トスル処デアリマス。
被告人等ハ政黨財閥ノ腐敗墮落、農村都市ノ疲弊窮乏、國民思想
ノ悪化等ハ一ニ政黨財閥ニ特權階級相結托シ利私慾ニ没頭シタル
ニ基因スルト主張シ居ルモ翻ツテ冷靜ニ事態ヲ遠觀スルトキハ凡ソ
事弊ハ其ノ由ツテ来ル処一朝一夕ノコトニ非ス、現下思想界ノ動搖經濟
界ノ不況ノ如キハ寧ニ我國ノミノ向題ニ非スシテ世界的風潮ノ餘波
トモ云フヘク我國ノ為政者財閥ニ特權階級ニノミ其ノ罪ヲ歸スルハ
餘リニモ事象ヲ曲解シタル見方ト謂フベキデアリマス勿論政界財
界及社會上層ノ一部ニハ腐敗墮落ノ蔽フヘカラサルモノアリ然多

ノ事弊、重疊セルコトハ遺憾ナラ此ノ一面ノミヲ見テ直ニ我國ノ現状
ハ滅亡ノ劇ニ至チ一日モ忽セニスヘカラサル危急存亡ノ秋ナリト解ス
ルハ、其ノ觀察極端ニ過キ決ニテ正鵠ヲ得タ見方デハアリマセ又
我國ハ他面今ヤ國力旺盛ヲ加ヘテ國際上ノ地位益々重ク産業ハ
發達シ貿易ハ伸張シ世界ノ脅威トナリ居ルコトモ示

(以下次第)

見逃スヘカラサル顯著ナル事實チアリマス

若シ夫レ、軍縮條約問題、金解禁問題、其ノ他國策上ノ重大問題ニ至リテハ、相反スル意見相對立シ、容易ニ是非ノ判断ヲ爲シ得ヘキモノニ非ズ。問題、如何ニヨリテハ、後世、史家ヲ待ツテ始メテ其ノ利害得失ヲ判断シ得ル、モノモアルノデアリマス。

又世ノ所謂、記者、評論家ノ中ニハ或事柄ヲ報導批判スルニ當リ、世人ニ刺激ヲ與ヘ、感興ヲ喚起スル爲、往々極端ナル事例ヲ捉ヘ、之シニ誇張粉飾ヲ加ヘ、事實ノ真相ヲ歪曲スル場合、斯ナカラサルガ故ニ、之ヲ其ノ儘、受け入ル、ハ、時ニ鬼ハサル謬解ヲ惹起スル虞ナシトセズ、况ヤ筆者其所不明ナル所謂怪文書ノ如キハ故意ニ事實ヲ捏造スル場合多ク、遠カニ之ヲ措信スルハ危険此ノ上モナキモノデアリマス。故ニ複雑極ナキ世ノ事象ニ對シテハ、須ラウク冷靜ナル感情ト沈着ナル思考ト

ヲ以テ、之シニ臨ムヲ必要トスルノテアリマス。在レ傳フル事
實ヲ輕信シテ其ノ眞偽ヲ明辨セズ、真相ヲ捉ヘスシテ憤ヲ發シ
又自己ノ觀ル處ト反對ノ見解ヲ有シ、或ハ反對ノ行動ヲ執ルノ
故ヲ以テ、直ニ之シテ國賊若ハ賣國奴ナリトシテ暴力ヲ以テ之
レニ對抗セントスルカ如キハ、断テテ許スヘカラス。况ヤ自己
ノ主張ヲ貫徹センガ爲、暗殺ノ拳ニ出ツルカ如キハ断テトシテ
之シテ排撃シナケレバナラナイノテアリマス。殊ニ立憲治下ニ
於テハ如何ナル場合ニ於テモ合法手段ノ外ハ絶對ニ之シテ許サ
ナクノテアリマス。
當聊ハ被告人等カ現下ノ事象ヲ觀察スル態度ニ於テ甚々遺憾ト
スル處ノモノガアルノテアリマス。又被告人等ノ行為カ憂國ノ
至情ヨリ出テタルトハ之シテ認ムルモ、其ノ執リタル手段ハ
不當不法ニシテ之シニ對シテハ國法ノ定ムル處ニ依リ重キ責任
ヲ負ハネハナラナイノテアリマシテ、本件事犯ヲ觀察スルニ當リ

テハ此ノ見地ニ立テ最モ冷譚今平ニ判断シナケレハナラナイノ
テアリマス。

第三節 本件事犯ト國法

前述ノ如ク被告人等ノ難局打開策トシテハ、非常手段タル直接
行動以外ニ途ナシト信シ、且事態急迫、一日ヲ忽セニスヘカラ
サルモノアリ、已ムヲ得ヌ、之レカ決行ヲ為スニ至リタルモノ
ナリト主張スルモ、國權國法ハ儼トシテ存在シ之レニ反ズルノ
直接行為ハ断乎トシテ之レヲ排撃シナケレバナラナイノテアリ
マス。

抑モ國家ノ安寧ハ國法カ嚴正ニ行ハルニトヨリ保タル、コ
トハ萬世不易ノ鐵則ニシテ法乱レテ國治ズルニトハナイノテア
リマス。若シ國法ヲ重ンセサルカ如キコトアラハ、綱紀弛廢シ
百弊、此ニ生シテ不測ノ禍害ヲ醸成スルニ至ルヘキハ火ヲ睹ル

ヨリモ明カナル次第テアリマス。

而シテ本件被告人等ハ多数共謀ノ上、一國ノ首相ヲ官邸ニ於テ暗殺シ又警察官、新聞記者等ヲ殺傷シ且各所ニ爆弾ヲ投擲シ夕ルモノニシテ貴重ナル人ノ生命ヲ奪ヒ係ラ國家ノ治安ヲ紊シ國法ノ定ムル大罪ヲ犯シ夕モノテアリマス。

如斯被告人等ノ行爲ハ國法ニ反スル非違ニシテ國家革新ノ手段ニ於テ既ニ謾リ居ル以上、此ノ謾リタル手段ニ依リテ國家ノ改遣ヲ断行セントスルモ、到底其ノ目的ハ達シ得ルモノニ非ズ。

其ノ結果ハ更ニ第一、第三ノ直接行動ヲ誘致シ、暴ニ酬ズルニ更ニ暴ヲ以テズルニ至リ、停止スル處ヲ知ラス、警俗、風ヲ爲シ、恐ルヘキ結果ヲ招来スルニ至ルノテアリマス。

凡ソ事ヲ爲スニハ其ノ目的ノ正シキハ勿論合法ノ手段ニ依リ正之堂々ノ方法ヲ以テ之レヲ遂ケルコトヲ要義トスルノテアリマス、若シ目的ノ爲ニハ手段ヲ選ハストノ思想ヲ是認シ國法ヲ無

視シテ直接行動ヲ容認スルカ如キ風潮、社会ノ一部ニ瀰漫シ居
レリトセバ、邦家ノ為ニ洵ニ遺憾ノ極ニシテ法律ニ照シ最重ニ
之シカ取締ヲ爲サナケレバナラナイノテアリマス。

第四章 法律ノ適用

本件事犯ハ既ニ説明シタルガ如ク古賀清志等海軍青年將校後藤映範等陸軍士官候補生並橋孝三郎等民間側被告人ノ三者合流シテ國家革新ト云フ同一目的ノ為、本件襲撃計畫ヲ立案シ之レヲ取行シタルモノニシテ各被告人ノ担当シタル行為ハ夫々個々ニ異リ居ルモ、全ク全計畫遂行ノ為ニ分担シタルニ過キサルヲ以テ、本件ハ各被告人ノ分担シタル各行為ヲ集团的ニ見ルト同時ニ夫々個別的ニ觀察評價シナケレバナライノテアリマス。

第一節 本件事犯ト内乱罪トノ關係

然ラハ集团的暴行々為トシテ、本件事犯ハ刑法ノ内乱罪ニ該当スルヤ否ヤノ莫ニ付テ先ツ考究スルニ、被告人等ノ当公判廷ニ於ケル陳述ニヨツテ明カナルガ如ク、同人等ハ政黨財閥並特權階級ノ

覚醒ヲ期スル為、本件事犯ヲ敢行シタルモノニシテ、其ノ目的タル
ヤ内乱罪ノ構成要件タル朝憲ノ紊乱ニ存セサルカ故ニ、本件事犯
ハ内乱罪ノ構成要素ヲ缺クモノト謂ハナケレハナリマセ又
次ニ一言附加シテ置キタイノハ本件事犯ハ騒擾罪ニ該当スルヤ
否ヤノ真テアリマス。騒擾罪ハ多数集合シテ暴行脅迫ヲ為シ、因
テ其ノ地方ノ靜謐ヲ害スルニ至リタルトキ成立スル犯罪ニシテ
本件事犯ハ國家ノ秩序ヲ破壊スル目的ノ下ニ犯人手分シテ數隊
トナリ、其ノ各自分担セル場所ニ於テ、或ハ爆彈ヲ投シ、或ハ人ヲ殺
傷シタルモノナレバ、其ノ犯行全部ヲ包括シテ觀察スレハ、或ハ騒
擾罪ヲ構成スルヤノ感ナキニ非スト雖之ヲ仔細ニ觀察スレハ
首相官邸其ノ他ノ襲撃ノ如ク、数名一團トナリテ行動シタルモノ
モ、多クハ邸内ニ於テ若クハ突差ノ間、民衆ノ氣付カサル裡ニ行ハ
レ、是等ノ行為ノ結果、其ノ現場附近ノ靜謐ヲ害スル程度ニ達シタ
ルモノナカリシヲ以テ騒擾罪ノ構成要件ヲ欠缺スルモノテアリマ

ス。

第二節 本件事犯ト叛乱罪トノ關係

次ニ本件ハ現役軍人ト常人トノ共同シタル集团的犯罪ナルヲ以テ、陸海軍刑法トノ關係ヲ一應論及スル必要アリト思ヒマス。現役軍人ニ軍刑法ノ適用アルコトハ異論ナキ處ニシテ又現ニ陸海軍々法會議ハ軍刑法ヲ適用處断シテ居ルノデアリマス。仍テ問題トナルハ現役軍人ト共犯關係ニアル本件ノ如キ場合ニ於テハ軍人タル身分ナキ常人ニ對シ軍刑法ノ適用アリヤ否ヤ、換言スレハ刑法第六十五條第一項ノ規定ハ本被告人等ニ適用アリヤ否ヤノ實デアリマス。刑法第六十五條ハ刑罰法全体ノ總則規定ニシテ軍刑法ノ總則ト見ルヘキモノナルカ故ニ現役軍人タル身分ヲ有スル者ト其ノ身分ヲ有セサル者トノ共犯ノ場合ニ於テハ、刑法第六十五條第一項

ニヨリ軍刑法カ常人ニモ適用アルニ非スヤトノ疑問ハ当然起ル
問題ナリト信スルノテアリマス
之レニ對シ当職ハ結論トシテ本件ノ場合ニ於テハ常人タル本件
被告人ニハ軍刑法叛乱罪ノ規定ノ適用ナシトノ見解ヲ有スルコ
トヲ先ツ第一ニ申述ヘテ置キマス。何トナレバ刑法第六十五條
第一項ノ規定ハ身分ヲ構成要素トスル犯罪例ハ瀆職罪ノ如キ
公務員タル身分ヲ犯罪ノ構成要素トスル場合ニ於テハ其ノ身分
ヲ有セサル者ハ單獨ニテハ之レヲ犯スコトが出来ナイ換言スレ
ハ公務員タル身分ナキモノガ收賄ヲ為スモ瀆職罪成立セサルノ
ミナラス他ニ如何ナル犯罪モ成立シナイノテアリマス。唯公務
員ト共犯關係ニアル場合ニ於テノミ刑法第六十五條第一項ノ適
用上瀆職罪ノ成立ヲ認ムルノテアリマス。即チ本來ハ全然犯罪
ヲ構成セサル事實ナルガ共犯ト云フ特殊ノ事情カ加ハリタル為
共同正犯トシテ處罰スルノテアリマス。及之身分カ刑罰輕重ノ

條件ニ過キサル場合即チ犯罪ハ身分ノ有無ニ不構成立スルモ身分アル者ニハ特別ノ刑ヲ科スル場合例ヘハ殺人罪ヲ親子ノ關係アル者ト否ラサル者ト共謀シテ犯シタル場合ノ如キハ刑法第六十五條第一項ノ適用ナク同條第二項ノ適用アル場合ニシテ此ノ場合ハ身分ナキ者ニハ身分アル者ノ刑ヲ科セス却テ通常ノ刑ヲ科スルコトニナルノテアリマス。

其起テ本件ノ場合ニ付考察スルニ本件被告人等ノ行為ノ如キハ軍人タル身分アルト否トニ不拘國法之レヲ禁シ起罰スルモノニシテ軍人タル身分アル者ガ犯シタル場合ニハ叛亂罪ト云フ特別ノ起罰規定ヲ設ケ之レニ臨ミタルニ過キナイノテアリマス。換言スレハ此ノ場合ニ於テ軍人タル身分ハ犯罪構成要件ニ非スシテ刑罰輕重ノ條件ナリト見ルヲ相当トシ刑法第六十五條第一項ノ適用アル場合ニ該當セヌ同條第二項ノ適用アル場合ト見ルノカ相当テアリマス。故ニ軍人ニハ軍刑法ヲ適用シ常人ニハ普通刑

法ヲ適用スルコトが法律解釈上相当ナリト信スル次第アリマ
ス。

第三節 本件事犯ニ適用スヘキ法條

以上申述ヘタル趣ニ依リ、最後ニ殘ル問題ハ被告人各個ニ適用ス
ヘキ法條如何ト云フ莫ニ在ルノテアリマス。

(一) 被告人等ハ大川周明、頸山秀三、本間憲一郎、杉浦孝ノ四名ヲ除
クシハ既ニ説明シタル如キ襲撃計画ヲ立テ之レヲ決行シ、
内大臣官邸、政友会本部警視廳、三菱銀行、逓電所等ニ手榴彈ヲ
投擲シ首相官邸等ニ於テハ犬養首相田中巡查ノ兩名ヲ射殺
シ、且西田税及平山、橋井兩巡查、永坂警察書記、高橋讀賣新聞記
者ノ五名ヲ、夫々拳銃ニテ狙撃シ重傷ヲ負ハシメタルモ殺害
スルニ至ラザリシモノニシテ被告人等ノ所為ハ爆発物取締
罰則第一條ニ違反シ且刑法所定ノ殺人及殺人未遂ノ罪ニ該

当スルガ故ニ是等ノ法条ヲ適用シテ起断スルヲ相当トスル
ノデアリマス、而シテ本件事犯ハ既ニ縷々説明シタル如ク
共同ノ目的達成ノ為、多数共謀シテ決行シタル犯罪ナルコト
明カナルヲ以テ孰シモ共犯ノ法条ヲ適用シテ起断スヘキモ
ノデアリマス。

更ニ之レヲ詳論スレバ

(1) 先ツ橘孝三郎、後藤因考、林正三、矢吹正吾、横須賀喜久雄、堀五
百枝、大貫明幹、小室カ也、春田信義、奥田秀夫、池松武志、高根澤
興一ノ十二名ニ付テハ

本件計画ノ内容ハ現状ヲ打倒シ國家ノ革新ヲ期スルニハ
非常手段タル直接行動ニ出ツルノ外ナク其ノ方法トシテ
首相官邸内大臣官邸政友会本部警視廳三菱銀行等ヲ襲撃
シ、首相官邸ニ於テハ犬養首相、内大臣官邸ニ於テハ牧野内
府ヲ暗殺シ之レヲ阻止セントスル者ヲ射殺シ而本件計画

決行ノ妨害ヲ為スモノト疑ヒ居リタル西田税ヲモ併セテ
暗殺シ且電報所ニ手榴彈ヲ投擲シテ之ヲ破壊シ、因テ以
テ帝都ヲ暗黒化シ人心ヲ不安ニ陥ラセメントスルニ在リ
タルモノニシテ、右被告人ノ内橘、後藤、林、奥田、池松ノ如ク直
接此ノ計畫ニ参畫シ居リタル者が共同正犯タル責任ヲ負
フヘキハ勿論ナルモ他ノ被告人ノ如ク、既ニ謀議成リタル
後全計畫ヲ打聞ケ参加ヲ求メラレ之ニ同意シ同志トシ
テ電報所ノ襲撃又ハ其準備的調査等全ク局部的行動ヲ為
シタルモノニ付テモ是等行動ハ全計畫遂行ノ為メニ為サ
レタル而已ナラス又其ノ性質上全計畫遂行ニ密接且重要
ナル役割ヲ演シタルモノト為スヘキカ故ニ決行当日並其
ノ以前ニ於ケル各自ノ行動ハ夫々相違シ居リタリトスル
モ、橘、後藤、林、奥田、池松ト同シク、本件事犯全体ニ對シ共同正
犯ノ責任ヲ負フヘキモノニシテ豫審ニ於テ是等ノ被告人

(2)

ニ対シ共同正犯ノ決定ヲ為シタルハ極メテ當ヲ得タルモ
ノト謂フヘキテアリマス。

川崎長光、堀川秀雄、照沼操、里沢金吉ノ四名モ亦橋等ヨリ本
件ノ全計画ヲ打聞ケラレ、之ニ同意参加シタルモノデア
リマス。尤モ決行前日タル昭和七年五月十四日指令ニ從
ヒ、各自家ヲ捨テ、愛御塾ニ集マリタル処、其ノ際偶々八員
ノ都合上川崎長光ヲ除ク他ノ三名ハ待機ヲ命セラレ、川崎
ノ之決行当日西田税ヲ暗殺スルコト、ナリタル爲、川崎ト
他ノ三名トノ間ニ其ノ實行シタル行為ニ差異ヲ来シタリ
ト雖モ初川崎カ橋等ヨリ西田暗殺ヲ勸説サレ躊躇ノ色ア
ルヤ是等三名ハ川崎ヲ激勵シ遂ニ右勸説ニ從ヒ西田ヲ暗
殺スル決意ヲ為サレタル事實アリテ是等三名亦川崎ノ
教唆者トシテ西田暗殺ノ責任ヲ分担スヘキモノナルカ故
ニ其法律上ノ責任ニ至リテハ川崎ト此ノ三名トノ間ニ軒

輕アルモノニ非ズ。而シテ既ニ成ヘタル如ク本件事犯カ
集团的犯罪ニシテ之レヲ個別的ニ觀察スヘキモノニ非ス。
全計画ノ内容ヲ知リテ之レニ参加シ其ノ一端ヲ分担スル
意思ヲ以テ行動シタル者ニ對シテハ其ノ分担シタル行為
如何ヲ問ハス本件事犯全部ニ對スル責任ヲ負ハシムヘキ
モノタル以上西田暗殺ヲ担当シタル川崎ハ勿論同人ヲ教
唆シタル他ノ三名亦均シク本件事案全部ニ對スル共同正
犯ノ責ヲ免ルヘキモノナクテアリマス。
豫審ニ於テハ此ノ四名ニ對シ爆発物取締罰則違反ノ罪ニ
付テハ共謀ニ止ムルモノ殺人ノ罪ニ付テハ西田暗殺未遂
乃至之レが教唆ニ過キスト決定シタルハ事實ノ認定上又
法理上妥當ナラスト信ズルノテアリマス。

(二) 大川周明ニ付テハ
同人ハ既ニ說明シタルカ如ク本来國家革新ハ

直接行動ニヨルノ外ナレトノ思想ヲ抱キ、多年之レカ實現ニ
努力シ相当ノ共鳴者ヲ得テ此ノ種ノ風潮ヲ馴致シ来リタル
モノニレテ今回ノ事件ハ全ク此ノ風潮ニ乘リテ發生シタル
モノト謂フヘク古賀等ハ大川ノ意ノ在ル処ヲ忖度シテ同人
ニ援助ヲ求メ大川亦古賀等ノ今回ノ舉ヲ以テ自己本来ノ計
画ヲ實現スルモノト考ヘ容易ク資金並奉銃ヲ提供シタルモ
ノナルコトハ大川並古賀ノ供述ニ依リ明カニレテ此ノ真頭
山秀三本向憲一部ト多少其ノ立場ヲ異ニスル処テアリマス
而シテ大川ノ本件事犯ニ對スル責任ハ法理上ハ豫審終結決
定書記載ノ如ク從犯ト認定スルヲ相当トスルモ其ノ實質ニ
於テハ共同正犯ニ比スヘキ程度ノ重キ責任ヲ負フヘキモノ
ト信スルノテアリマス

(三) 次ニ頭山秀三本向憲一部ノ兩名ハ本件襲撃計画援助ノ為古
賀等ニ奉銃ヲ提供シ又杉浦孝ハ後藤園彦、林正三等ノ命ニ依

リ同志間ヲ往復シ之レカ連絡ノ任ニ当リタルヲ以テ就レモ
本件事犯全部ニ対スル幫助者トシテ責任ヲ負フヘキハ当然
ニシテ豫審終結決定書記載ノ如ク爆発物取締罰則第一條違
反、殺人及殺人未遂幫助ノ罪ニ該当スルモノト思料スルノテ
アリマス。

第五章 被告人各個人犯情ト求テ

第一節 被告人各個人犯情

今迄申述、タル処ニ依リ、本件事犯ニ對スル全般約説明ヲ終リ、
ル故之ヲ、被告人各個人犯情ニ付一言ニタイト思ヒマス。

(一) 橋孝三郎

本件事犯全体ノ計畫ハ、概テ古賀清志ノ創意ニ係ルニ、其ノ立案
ニ當リテハ、橋元亦謀議ニ參畫シ、殊ニ愛郷熟生ノ担当ニタル變
電所ノ襲撃ハ、實ニ此ノ橋ノ創意ニ出テ、且自ラ之レカ指揮統制
ヲ為シタルヲ以テ、今人亦本件事犯ノ首謀者ノ一人ナリト謂フ
ハ、其責任ハ、民間側被告人中最ニ重キモノト信スルノ所アリ
マシ

橋カ愛國ノ至誠ヲ、本件事犯ヲ執行シタルコトハ、之レヲ認メ
其ノ心事ヲ諒トスルニ、今人ハ、其ノ死下ノ愛郷熟生多數ヲ本件
ニ勧誘加担セシメ、是等熟生ノ生涯ヲ誤ラシメタル而已ナラス

其ノ計畫ニ係ル変更ヲ遂行成功ニシテトセニカ帝制ヲ暗黒世
界ト化シ收檢スヘクヲサル混乱状態ニ陥レ其ノ結果恐ルヘク
モノアリタルコトハ推測ニ難カラサシク知テアリマス從ツテ其
ノ心事ノミニ捉ハレ事犯ノ責任ヲ輕視スヘキモノト非ス。其ノ
責任ヲ向テ宜シク最罰ヲ以テ臨ムヘキモノト信スルノヲア
リマス。然レトモ今人ノ抱懷スル思想ハ元來建設ニ在リテ破壞
ヲ目的トスルニ非サリシモ、偶々古賀等ノ本件計畫ト國家革新
ノ理想ニ於テ共通スル如クアリシヲ以テ此ノ等ニ参加シタル實
係ニ在リ且橋ハ事ヲ拳ラルニ先立テ既ニ滿洲ノ進駐ニ其ノ實
行ニ與ラサリシ眞等ハ今人ニ對スル刑ノ量定上考慮ヲ加フヘ
キモノト思料致シマス

(三) 後藤因彦

今人ハ橋ノ總參謀トシテ本件事犯ニ參畫シ五月十二日橋退京
後ハ今人ニ代ワテ一切ノ指揮命令ヲ為シ執行當日ハ変更ヲ遂

撃ノ總指揮官トシテ采配ヲ振ヒタル力故ニ其ノ明責任モ亦
橋ノ次位ニアルコト言ヲ俟タサル処ナリマシ

(三) 林 正三

今人ハ後藤園彦ト共ニ愛郷熟ノ指揮者タル地位ニ在リ
尚ニ重キヲ為シ居リタル關係上橋ノ議ニ賛同シ其ノ参謀ト
シテ本件事取ニ活躍シタルヲ以テ本来後藤ト全事ノ責任
ヲ負フヘキモノナルニ其ノ参加シタル時期ニ於テ後藤ヨ
リ幾分遜リ其ノ分擔シタル役割ニ於テ今人ニ稍ニ劣ルニ
ノアリ其責任亦今人ノ次位ニ在リト謂フヘキナリマシ

(四) 矢吹正吾

横須賀 横須賀 轟 五百枚 大貫明幹

小室力也

今人等ハ変形新襲撃ノ実行隊ニシテ矢吹

横須賀 大貫ノ三名ハ現案ニ変形新ノ水揚ホニテ装置ノ

一部ヲ破壊シ且手榴彈ヲ投擲シ居リ其ノ向投擲ニ係ル手榴

彈ノ炸裂シタルト云トノ區別アルニ之レ畢竟遺憾ノ結果ニ過

キ之ニテ、其ノ社会ニ及ホキクハ危險性ニ至リテハ均シク重

大ナルカ故ニ相違重ク処断スル必要アリト信シマス。

痛ハ矢吹、横須賀、大貫ト共同正犯ノ關係ニ在リ、今人等カ

手榴彈ヲ投擲シタリトシ、之ト共同正犯ノ責任ヲ負フヘキハ當然

ナリト雖モ自己ノ擔任セル犯罪ノ実行ニ尚リ重要ナル員ノ發

見ヲ免ル、余、手榴彈ヲ投擲セタリト逃走シタリ事情アリテ

以テ此ノ責ヲ考慮シ、最モ三名ヨリ稍々輕ク処断シテノ然モ

ト思料シマス。

小室亦 場合様矢吹等カ手榴彈ヲ投擲シタル處ニ付、共同ノ

責任ヲ負フヘキト勿論ナルモ小室自身トシテハ自己擔任ニ

係ル犯罪ニ際シ恐怖心ヲ生シ手榴彈ノ投擲ヲ中止シタルカ故

ニ、此ノ責ヲ考慮シ、場合モ更ニ輕ク処断シテノ然モト

思料シマス。

五) 春田信義

合人ハ自ら変更所ノ襲撃ヲ担南セザリシニ
本亦変更所ノ調
査ヲ為シ、且同志均連絡ノ任ニ當リタルコト
トノ關係 久吹野佐行隊ニ比シ篤分甚ノ刑事責任ヲ輕減シラ
可然元ノト思料シマシ、

(六) 杉 浦 孝

合人ハ本件計畫遂行ノ為 後藤園彦 林 正三 等ノ余ニ依リ
合志均ヲ往復ニ連絡ノ任ニ當リ 種々活躍シ 各種ノ任務ヲ担南
シタル合志春田信義ニ比シ其ノ活躍ノ範圍至程交重大ナルニ
ノアルカ故ニ合人ノ如ク他ニ担當遂行シタル 行為トシト案
合人ヨリ特ニ輕減スルノ理由トシト信シマシ、

(七) 高根中興一

合人ハ大貫以幹ト共ニ鬼怒川水力東京支店ヲ襲撃シ担當シ
合妻亦此構内ニ手榴彈ヲ投擲シタルニ無シ 遂以シテ如ク其
ノ本件事犯ニ参加スルニ至リ 合人ノ情ニ於テ 他ノ被告人ニ比シ

怒スハキトスアルヲ以テ、最低刑ヲ以テ知罪スレハ足レリト思
料シマズ。

(ハ) 奥田秀夫

合人ハ血盟團事件ニ關係シ再々々々。本件事件ニ参加シ奉
事。本件計畫遂行ニ必要ナル調査ヲ為シ且決行ニ當リテハ
自ら、才四班トシテ三菱銀行ヲ襲撃シテハ、此ノ才四班ハ
他ニ班員ナリ、奥田一人ニ過キサニ、之レ全ク當日ノ人員
取置ノ都合ニ出ラズニ、之レ其ノ位一方ノ指揮者ノ地位
ニ在リタムコトハ當公判廷ニ於ケル供述ニ依リ明白ナルカ故
ニ、合人ノ本件ニ於ケル地位ハ奥田計畫ヲ担當シタム愛仰
塾生ト今日ノ論ニ非ズ、其ノ刑ヲ上査任本庭ヲ愛郷塾生ニ比
シ違ニ重キモノアリト謂ハナケレハナリコセシ。
右池松武志
合人ハ葉ニ説明シタムカ如ク、後藤映義ヲ陸軍志官假補生ヲ

代表の古賀清志等トノ向ノ交渉ノ任ニ當リタハセテアリマ
ス。士官候補生ハ常年陸軍士官學校在学中ニシテ構内宿舎ニ
起居シ機舎ヲ以テ海軍側ト直接連絡ヲ執ルヲト困難ナル状態
ニ在リタハセテ池松ハ此ノ兩者ノ向ニ介在奔走シ計畫ニ
関スル意見ヲ傳達シ連絡ヲ保ツニ毫末ノ違異ナカラシメタ
ルヲアリマシメス。従テ池松ナカリセム士官候補生側ハ本
件計畫ニ参加スル機舎ヲ得ナカクト思フヲアリマス。現ニ
海軍側ニ在リタハセテ行當日士官候補生等ヲ其ノ集會場計ニ迎フ
ル迄ハ令人等ヲ参加シ得ルヤ否ヤヲ付多大ノ懸念ヲ抱イテ居
タリテアリマス。如斯士官候補生カ本件計畫ニ参加シタ
ルハ池松カ連絡係トシテ完全ニ其ノ任務ヲ果シタニ因
テ此ノ見地ヨリスレハ令人ノ士官候補生側ニ在リタ
ル係ハ後藤園等ノ愛護塾生ニ在リタ
ル係否夫以上ノ重要
生ヲ有スルモノト滑フヘキテアリマス。殊ニ池松ノ軍上連

係係トシテ法羅ニタルニ止マラズ奥田合謀 本件計畫ノ遂行ニ必要ナル進言ヲ為シ其ノ決行トシテ非常ナル便宜ヲ與ヘタル事行アリ。且決行ニ當リテハ内村官邸ニ於テ自ラ手榴彈ヲ投擲シ警視廳ニ於テ拳銃ヲ発射シタルモノナルカ故ニ是等ノ事情ニ照ラシ責任重キモノト思科シニシテ、

(一) 堀川秀雄、照田操、黒澤金吉

既ニ追記シタル如キ理由ニ依リ今人等カ本件事犯全体ニ於テ共同正犯トシテ責任ヲ負フヘキコトハ勿論ナルカ假リニ豫審終結決定書ニ載ル如ク殺人ノ重キ作テハ西田暗殺未遂ノ殺後 爆発物取捨罪野違又ノ重キ作テハ軍ニ共謀ニ止マルモノトスルモ、爆発物取捨罪用カ本件事犯ノ重大性ヲ加ヘタル事情並ニ川崎、西田暗殺カ本件事犯ノ理由ヲ為シタルノ事情ニ鑑ミ此ノ三名ノ責任年輕カラザルモノト謂ハナキレハナリ。セ又、

唯此ノ三名ノ私情ヲ個別的ニ仔細ニ検討スレハ、
西田ハ堀川ヨリ其ノ關係セシ程交稱シ薄キカ故ニ
比ニ案分輕ク処分シテ可然ス。ア、ア、ア、

(士) 川崎長志

令人ハ計謀並盟團ノ一員ニシテ、
西田ト面識アリ、其ノ西田
暗殺担当者ニ選ハレタリ。余、
之カ力ニ外ナラズ。

本件並私ニ關係セシ民間側面ノ際中、
他ニ西田ト相識シ、
ナリ。令人ノ暗殺ヲ決行セシトスルニ、
川崎之ヲ引受ケテ、
此ト他ニ通商ノ担当者ヲ發見スル能ハル事
極メテ重要ニシテ、
余ノカ、
以テ此ノ責ニ任テ、
川崎ノ地位ハ極メテ重要ニシテ、
余ノカ、
予代ハ難キ兇悪トシ、
川崎ヲ殺シ、
余ノカ、
然レトス事、
未遂ニ終リ、
西田ノ重傷、
喜不、
早キ金付、
日常ノ生活ニ支障ナキニ至リ、
余ノカ、
此ノ責ヲ科シ、
予代ハ、
思科ニシマズ。

(十二)

大川周明

同人ノ所為ハ豫審終結決定書記載ノ如ク、本件事犯ノ從犯ニ過キサル
モ、同人ノ存在ハ、既ニ説明シタルカ如ク、本件事犯ニ重大ナル關係ヲ有シ
即チ、同人ヨリ潤澤ナル資金ノ提供ナカリセハ、吉賀等ノ活動、斯程迄ニ
熾烈ナルヲ得タリシヤ否ヤ、又大川ヨリ拳銃ノ提供ナカリセハ、頭山、本間ノ
提供シタル拳銃ノミシ以テシテ本件事犯ノ結果、斯程迄深刻ナリシヤ否ヤ、
共ニ疑ナキヲ得マセ又、或ハ活動資金ノ窮乏、或ハ使用武器ノ手薄ノ結果、
本件計畫自体ニ齟齬ヲ来シタルナキヤ、断言ヲ許サ、ルモノカアリマス、
殊ニ、本件事犯ノ根柢ニ遊ワテ考フルニ、國家革新ハ本件ノ如キ直接行動
ニ依ルノ外、途ナレトノ思想ヲ、國民ノ一部殊ニ有為ノ青年ノ間ニ根強ク
植付ケ、現下ノ日本ニ於テハ非常手段ニ依ル國家革新ノ遂行最大急務
ナリトノ危険ナル思想ヲ醞釀スルニ至ラシメタル責任ノ一端ハ、方ニ大川
周明其ノ人ノ負フヘキモノテアリマス
斯様ニ觀察シ来レハ、本件ニ於ケル大川ノ行為ハ從犯ニ該當スルトハ云

(十三)

へ事件ニ於ケル地位ハ洵ニ重且大ニシテ其ノ犯情、共同正犯ト同一視ス
ヘキモノテアルヲ以テ同人ニ對シテハ嚴重處断スル必要カアルノテ
アリマス

頭山秀三 本間憲一郎

此ノ兩名ハ共同シテ古賀等ニ拳銃六挺ヲ交付シタルカ、是等ノ武器
カ威力ヲ發揮シ、或ハ首相ヲ殲シ、或ハ西田ヲ負傷セシムル等、重大ナ
ル結果ヲ惹起シタルコトハ、古賀ノ證言ニ依リ、極テ明白ナル而已ナラ
ズ、頭山ノ如キハ、本件ニ共鳴シ、古賀等ヲ種々激励シタル事實アリ、本
間亦古賀等ノ牧野内府暗殺失敗ノ後ヲ承ケ、其ノ暗殺計畫遂行ノ
為ニ努力シタル事實アリテ、此ノ兩名ニ對シテハ相當重ク處断スル必
要カアルノテアリマス

更ニ頭山、本間ノ兩名ニ對シテハ、別ニ恐喝ノ事實起訴セラレ、此ノ實ニ
付テハ既ニ共犯者タル山本貞美等ニ對スル恐喝被告事件ノ公判ニ於テ、
枕野検事ヨリ詳細ナル論告アリ、裁判所又被告人側ニ既ニ其ノ論告ヲ

聽取済ナルヲ以テ、茲ニ之レヲ援用シ再論ノ煩ヲ避ケタイト思ヒマス。

第二節 求刑

以上申述ヘタル事實ニ基キ、最後ニ求刑ヲ為スニ當リ、當職ハ最近大審院ニ於テ斯ノ種ノ犯罪ニ對スル量刑上極メラ參考トナルヘキ判決（昭和八年十一月六日佐郷屋留雄ニ對スル殺人上告事件）カアリマシタ。其ノ判決ノ理由書ニハ「凡ソ犯罪ヲ決意スルニ至リタル動機ノ實質ハ、犯罪行為ノ價值判定上、重大ナル關係ヲ有スルモノナルカ故ニ刑ノ量定上犯罪ノ動機ニ付、深甚ナル考慮ヲ拂ハサルヘカラサルハ勿論ニシテ、殊ニ其ノ動機カ、本邦固有ノ淳風美俗タル忠孝其他ノ道義上、又ハ公益上非難スヘキモノナリヤ將又宥恕スヘキモノナリヤハ、刑ノ適用上特ニ斟酌スヘキモノナルコト疑ヲ容レサル所ナリ。然リト雖、刑ノ輕重ハ、ゆスレモ犯罪ノ動機ノ一矣ノミヲ標準トシテ抽象的ニ之ヲ論断スヘキニ非ス、更ニ犯人ノ性格、被害者ノ地位、犯罪ニ因リ法廷秩序ニ及ホシタル影響ノ程度、將來ニ於ケル豫防警戒上ノ關係、其ノ他

211
觀客觀ノ兩方面ニ於ケル諸般ノ情狀ヲ較量シテ、各犯人ニ付、個別的ニ之ヲ決定スルヲ正當ナリトス。ト説明シアリ。寔ニ良ク刑ノ量定ニ關スル刑政ノ本義ヲ道破シタルモノニシテ動機ノミヲ偏重シテ行動ノ當否及其ノ影響ノ如何ヲ輕視セニトスルモノアルヲ警メタルモノナリ。而シテ此ノ趣旨ハ當今ノ世相ニ對シ、極テ適切、妥當ニシテ本件ノ量刑ニ關シテモ大イニ參考トスヘキモノト信シマス力故ニ、茲ニ右判決ノ趣旨ヲ援用スルト同時ニ、本件モ亦、既ニ述ヘタル如ク、被告人等ノ動機ニ於テ諒トスル處アルモ、其ノ社會事象ニ對スル判断必スシモ正鵠ナラス、其ノ執リタル手段方法甚タシク兇暴ニシテ其ノ社會ニ及ホシタル影響モ亦極メテ重大ナリシコトヲ再説シテ、茲ニ各被告人ニ對シテ次ノ求刑ヲ為ス次第テアリマス。

橋 孝三郎 = 對 =

後 藤園彦 = 對 =

林 正三 = 對 =

矢吹正吾 = 對 =

横須賀喜久雄 = 對 =

塙 五百枝 = 對 =

大貫明幹 = 對 =

小室力也 = 對 =

春田春義 = 對 =

奥田秀夫 = 對 =

池松武志 = 對 =

高根沃典 = 對 =

杉浦 孝 = 對 =

堀川 秀雄 = 對 =

無期懲役

懲役十五年

懲役十二年

懲役十年

懲役十年

懲役八年

懲役十年

懲役七年

懲役七年

懲役十五年

懲役十五年

懲役七年

懲役七年

懲役十二年

照	沼	操ニ對シ	徳役十年
黒	澤	金吉ニ對シ	徳役十年
川	崎	長光ニ對シ	無期徳役
大	川	周明ニ對シ	徳役十五年
頭	山	秀三ニ對シ	徳役十年
本	間	憲一部ニ對シ	徳役十年
二	夫	々	處スヘキモノト 思料シマス

持高秘第六。八八號

昭和八年十二月五日

警視總監藤沼庄平



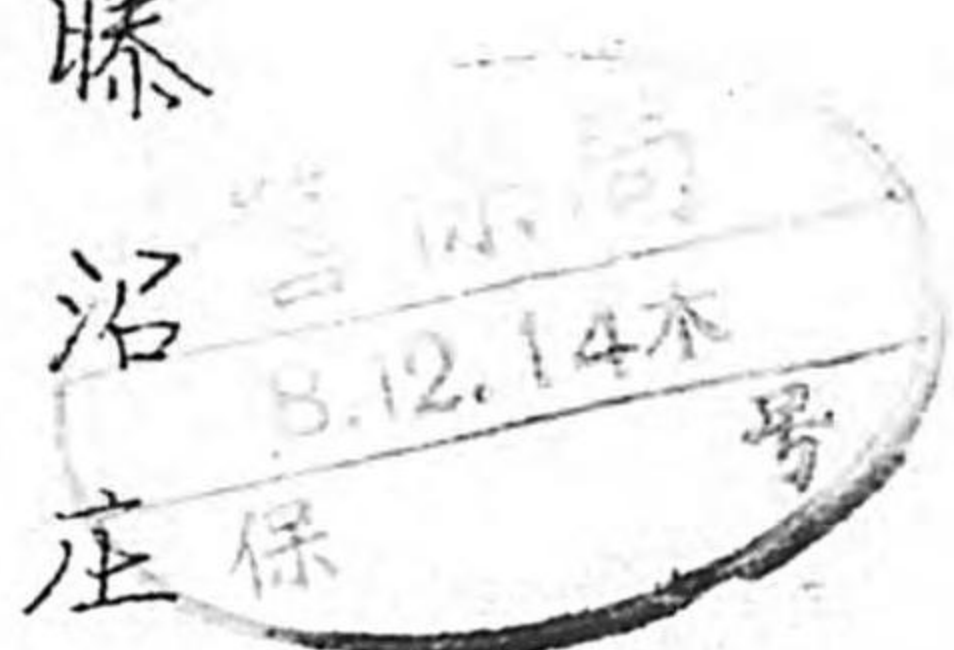
務大臣山本達雄殿
各廳府縣長官殿

五一五事件民間側公判狀況ニ關スル件

(第二十五報)

東京地方裁判所陪審第一端法廷ニ於ケル標
記帶二十五回公判ハ未日午前十時十分開廷午
後三時閉廷ナルガ其ノ狀況左記ノ如クニシテ何
等事故無之
記

二五回



一日 時 十二月五日 午後三時十分

一場 所 前報之同シ

一 裁判長以下係判檢事 吉江檢事欠席、外前報之同シ

一 被告人 楠孝三郎外十九名全部

一 辯護人 (本日出席者)

石川 淺 楠木鏡之助 池田謙太郎 岩松孝雄

花井 忠 林 逸 郎 龜山 要 柏木五百次郎

金石一雄 横田隼雄 植田亥之吉 栗原宰之助

前川盛一郎 深作貞治 藤沼 光 遠藤榮三郎

瀬口正吉 瀬崎由太郎

(以上十八名)

一 一般傍聽人 三〇名

二 特別傍聽人 二〇名

三 家族傍聽人 七名

一、特別傍聽人中ニハ特記スヘキ知名ノ士ナシ
一、法廷内ノ状況

八年前九時八分被告橘孝三郎以下十九名構内
假監到着内外ノ警戒從前ノ通り

乙午前十時五分裁判長以下係判檢事入廷スレ
ハ之レト前後シテ各辯護人並ニ新聞記者等
入廷シ十時十分各被告ノ入廷ヲ待ツテ傍聽人
入廷着席シ直ニ開廷トナル

開廷ニ先立テ遠記者ヲ附スル事後前ノ通り
裁判長ハ本日ヨリ弁論ニ移ル旨ヲ宣スルヤ
冒頭深作貞治并護人ハ自席ヨリ立テ先ツ弁
論ニ入ル前ニ歎願書群馬縣江田村々民全部
一四九名、宮城縣畑岡村々民全部八七名、岩手縣
蛭澤某外五四三名、荒川區加藤某外二〇〇名外

(2)

ニ鳥取縣三徳村々民三五〇名ガ神前ニ於テ懇メ
タル決議文ト稱シテ之レシ讀ミ何レモ延下ソシ
テ取次ヲ提出シ為シタル後并論ニ入リ
九月以來本件被告ニ對シ理解アル裁判長ノ
審理態度ニ謝辭シ述ベ次ニ木内檢事ノ論告
ト海軍側山木檢察官ノ論告トシ對照シ
木内檢事ノ情理ヲ盡シタ点ニ對シテハ敬意
ノ意味シ表シ續イテ本件ノ對象ニ櫻田川
事坂下内事件或ハ赤徳義士ノ義舉ヲ引
用シ縷々大声叱呼并論熱シ来ルヤ其ノ論
中ニ「私ノ并論ニハ充分述ベラレル様ニト友
人ガ態々伊勢大廟ニマテ参拜シ祈願シテ居
ルテハアリマセンカト述ベタル際午前十一時
二十分頃傍聴席ヨリ茨城縣西茨城郡西山内

村大字稻田九一番地竹林信吉當四十四年カ萬
歳トト夫声ニ叫ビタルモ廷内ノ秩序ヲ紊リ
タルノ模様ナク靜肅ニ守リタル儘續行シ午
前十一時四十八分ニ至リ裁判長ハ午後八正一
時ヨリ再開スル上目ヲ述ベテ休憩シ宜ス

分午後一時五分再開深作并護人ハ午前二引
續キ赤穂義士ノ大義名分ヲ説述シ或ハ論告
ニ及駁シ加ヘ被告ノ行為ハ現下我國情ヨリ見
テ之レシ義舉ナリト喝破シ又ハ木件ニ依リ社
會及内外ニ及ホシタル影響ヲ引例シテ功績
ナリト賞揚スル處アリテ午後二時三十分閉
ニ入リ

6. 公ニ時立ニ分再開并護人ヨリ後着シタル款
願書ト稱シ南正住有志等ヨリ其マレル一千

444
餘名分ヲ延下シテ取次ヲ提出シ為シタル
が裁判長ハ本日ノ弁論ハ之レニテ終リ次回ハ
引續キ十二月七日午前十時ヨリ開廷スル旨ヲ
宣レテ午後三時無事閉廷トナレリ
(以下次葉)

一、公判ノ状況

裁、デハ之レヨリ年論ヲ

深作并護人（年論概要）

年論ニ入ル前ニ茲ニ歎願書ガ来テ居リマスカラ提出シマ

ス

群馬縣干江田村々民全部

一四九名

宮城縣畑岡村々民全部

八七名

茨城縣下堀澤氏外

五四三名

荒川区加藤氏外

二〇〇名

外ニ鳥取縣三徳村三五〇名ノ村民ガ大會ヲ開イテ神罰ニ

於テ認メタル決議文ヲ私ニ宛テ

五、二五事件被告等ガ採ツタ手段ニ於テ国法ニ觸レタ

事ハ誠ニ遺憾トスル所デアル然レ現下ノ国情ヨリ省ミ

テ憂国ノ至情ニ出テタ行為ニ外ナラズ依ツテ感謝シナケ

テ

レハナラ又其ノ意志ヲ重ンゼテ弁論ヲ求ベテ賞ヒ度イ
ト斯ノ如キモノデアリマス

九月以來我ガ裁判史上類例無キ五、一五事件橋以下ノ
各被告ニ對シ出來得ル丈ケ思想ニ就キ當法廷ニ於テ述
ベテ戴キマシタ事ハ裁判長殿ニ對シテ我々弁護人
一同感謝ニ堪ヘマセン此ノ事ハ龜山弁護人ヨリモ感謝
ノ意ヲ求ベラレル筈デアリマス

又木内檢察官ノ論告ト海軍側ノ山本檢察官ノ論告ヲ
比較シテ見ルニ山本檢察官ハ動機ヲ認メズ被告ノ認
識不足ヲ指摘シタノデアリマシタガ

木内檢察官ハ被告ノ思想及動機目的ヲ充分ニ認メテ居
ルノミナラス犯罪ノ対象ヨリ特權階級、財閥、政黨一部ノ
腐敗墮落ヲ論ジ之レヲ肯定シテ居ル矣ニハ敬意ヲ表
シマスガ論告全体ヨリ見テ被告橋以下及自分ノ主張ヲ

認メナカッタ矣ニ付弁護人トシテ闘ハネバナラナイノデア
リマス

五二五事件ハ非常時が生ンダ慘事デアツテ非常時ニ
ハ非常手段ヲ認メナクテハナラナイ

彼ノ櫻田門外テ井伊大老ノ首ヲ切ツタ水戸浪士ノ行
為ハ処分ニ於テ斬罪ニ処セラレテモ明治二十二年五月
二日靖国神社ニ合祠サレ後ニ高橋寛清金子等ハ衆レ
多クモ明治天皇カラ贈位ヲ賜ツタノデアリマセンカ

私ハ田中伯、徳富ヲ証人ニ申請シタガ本内紛争ハニニ
及対シタ、又警鐘ヲ乱打シテ各弁護人ハ活動ニシタケレ
ド被告ハ愛國ノ至情ニ出テタル真情ハ諒トスルモ不當不流
ル行為ハ國法ニ照シテ重キ責任ヲ負ハスト論告中ニモ
八千万同胞カ現下ノ國情ヲ見テ非常時ト云ハナイ者ハ無イ、
非常時ニハ非常手段ニ依ルベキニ拘ラス証人ヲ却下シクカ之

等ノ証人ヲ召喚シテ取調ヘタナラハ名裁判ト云フヘク後世裁判史上ニ残シタイカラテアリマシタカ当弁護人一同遺憾ヲツタヒテアリマス

五一五ノ被告ハ政党財閥特権階級ノ勝手気儘ナ事シテ来タメ止ムニ止マレズ出テタ行爲テ被告ハ國体ノ尊嚴ヲ知ツテ居タカラノ事デアアル日本ノ政治カ腐ツテ居タカラテ非常時ナシシテシテテアリマス木内檢察官ノ論告中三月事件十月事件ニ端ヲ發シタト言フテ居ラレルガ之レハ私ト亀山君ヨリ外ニ知ラナイ事デアアル

三月事件ト十月事件ヲ知ツテ居タナラハ不当不法ノ文句ハ出テ来ナイ筈ナリ
奮ツテ居ル日本ヲ救フニハ愛國ノ至情ヨリ出ナケレバ駄目ナリ
滿洲事変ヤ國際聯盟脱退五一五事件皆全レテアリマス現下ハ非常時テナイト言フ事ヲ論告ニ云ハレテ居ルカ思想、教育、

政治、経済、外交、一ツトレテ非常時デナイモノアリマセウカ、
福氏ハ皇道國家ヲ建設レナケレハナラナイト云フテ居ラレル。
聯盟退脱ノ時ニ詔勅ヲ賜ツテ居ル其ノ内容ノ一節ヲ詳シテモ
非常時タルコトハ明カテアル。

所謂非常時ニハ理論ヲ以テハ行ハレナイ直接行動ニ依ラネハ
熱目夕カラテアリマス。

滿洲承認問題ニ見テモ判ル通り建國精神ニ出テナケレハナラ
又、亦日本主義ヲ採ラナケレハナラナイノモ總テ実行テナケレ
ハ日本ハイケナイト云フ理由デアリマス。

私ハ檢察官ト及対ノ立場ニアルカラ云フノテハナイ時世ト神
カ必要トレテ五、一五ハ為サレタ事デアリ帝國ノ現状ノ概ハソ
トレテ出テタ行為ヲ被告ハ手段ヲ誤ツタカ否カ検討スレハ私
ハ誤シテ居ナイト思フノデアリマス。 以下次第

更ニ坂下門事件ニ就テ沢本氏ノ著書中ニ沢本氏ト田中伯トノ
向答ガアリマスガ沢本氏ハ暗殺ハイヤナイカト田中伯ニ
ト田中伯ハ暗殺ハ正道デハナイガ権道デアルト答ヘラレタ
坂下門デ安藤ヲ殺レタノハ目的ガ皇道維新デアツク去スベキ
時ニ出タ行為ハ義挙デアアル
即チ全國ヨリ歎願ニ出テタル理由ハ橘以下ノ行為ハ義挙ニシ
テ之レヲ罰スルニ非ラズト云フ國民ノ叫ビデアアル
人ヲ殺ス事ハ悪イカ出スヘキ時ニ出タ行為ハ義挙デ日本武
ガ川上皇帥、刺殺レタ事或ハ鎌足公ガ天皇ノ御前デサヘ入来ヲ
斬ツテ血ヲ流レタ鎌足公ノ膺懲ヲ見テモ明々白々デアアル
橘以下ノ行為ハ國体ノ尊敬ガ目的デアリ憂國ノ至情ヨリ出テ
タルモノナリニ事ハ五、一五事件ノ為メ日本ノ難局ハ打席サレ
ツアル事ニ依ツテ判ル
或ル一部ノ識者ハ非常時ハ解消レタノダウト言ツテ居ルガ

今ノ内閣ノ閣議ノ状態ハ如何デアリマセウカ内外ノ状態ハ決
レテ非常時ヲ出テ居リマセン五一五事件陸海軍々人ヤ極以下
ハ手段ヲ誤ツテ居ラナイ

檢察官ノ論告正シカ私ノ弁論正シキカ将来ノ歴史カ證明レマ
ス武士ノ鑑赤穂義士ノ如ク五十年百年先ノ後世史家ニ依ツテ
判ル現下日本ノ國情カラ来夕事デアル私ノ説ハ誤ラント思フ
今回ノ事タルヤ前ニモ述ベタガ天デアアル眞ニ篇矢ト云ハスシ
テ何ゾヤ

海軍側被告古賀ハ合法的デアハ何ウシテモ駄目ダツカラ非合

法ニ出夕ノダ

村山ハ犬養ヲ殺レタノハ被告デアハナイ政黨財閥特權階級ダ

ト云ツタ

中村ハ止ムニ止マレズ行ツタ

三上ハ現状デアハ駄目ダ

黒岩ハ、^口議會モ駄目政黨モ駄目止ムニ止マレズ生ラ捨テ、天
皇ノ劍ヲ振ツタト各云ツテ居ル

政界ノ根本淨化ハ五、一、五事件ニ依ツテ為サレタ犬養ヲ暗殺シ
夕ノハ海軍側被告テナクテ腐敗シタ政黨財閥特權階級デア
被告等ノ行為ハ無理テナイ坂下門事件ノ六人ノ中五人ハ水戸
ノ人デアツテ王政復古ガ目的デア
幕府ニ於テ死刑サレタ人モ今ハ神ニ為ツテ居ル本件被告等ノ
行為ハ確カニ國家自衛權防衛權ノ発動ニ外ナラヌ、

私ノ友人ヨリ手紙カ来テ居リマス橋以下ノ裁判ニ於テ此ノ并
論ニ充分述ベラレル様ニト懇々伊勢大廟ニマテ参拜シテ祈願
シテ居ルデアアリマセンカ、

ハ竹林信吉ハ傍聽人帝ヨリ^口萬歳ツト叫ブ

海軍側ノ并論ニ於テ血涙法ヲ守ルト言ツテ異議ガ出タ血涙法
ヲ守ルカ、血涙徳ヲ守ルカ換言スレバ國体重キカ國法重キカ、

此ノ被告達ノ行為ハ憂國ノ至情ヨリ出テ王政復古ト共ニ昭和
維新ヲ建設シタトカ言フ事ニナルノデアアル

嘉永年間ニ浦賀ニ黒船が来テ大砲ノ音ニ眼が醒メタ夫レカラ
ハ西洋ノ文明が入り金物人ト人ヲ下ニシタノデアアル日本主義
ヲ排シテ西洋風ヲ執ツタ結果デカカラ維新ノ元勳西郷南洲モ
征韓論ヲ破レタが大化ノ革新マテ持ツテ行カナケレハナラナ
イ

總テ日本精神ニ依ツタナラハ政治教育法律財閥特権階級ノ腐
敗モレナカツタ西洋流テハ駄目ヲ佛蘭西革命トナツテ現ハレ
タ事實ヲ見テ明カデアリマス

皇道ニ依ラナケレハナラヌ原因ハ其処テ血族法ヲ護ルト云ツ
テモ日本ノ國体ハイケナイ田中伯モ血族徳ヲ護ルト云ハレテ
ル

西洋ノ教育ヲ受ケタ者ハ秋霜烈日ノ如クシテ法ヲ重シジ罰ヲ

重クスル、日本主義ハ必ズ動機ニ重キヲ置ク筈ナシ
テモ六職冠ノ銚足ハ罰レテナイ此ノナ大事件ハ百年或ハ二百年ニ一度レカ出来ナイ被告等ノ動機目的原因ニ依ツテ罰セテケレハナラナイ、

爆発物取締罰則ハ明治十七年ニ出来タモノテ三島通陽が爆弾ニ襲ハレタカラ造ツタ規則ヲ随分因縁カアリ時代違ヒノ規則ヲ通用サレテ居ル

更テニ赤穂義士ノ慶分問題ニ入りマスカ元禄時代ハ一方ハ物質文明ハ極端ニ発達シ一方ニ於テハ精神文明モ発達シタ時代表長則公切腹サレタ一年前既ニ日本主義ヲ叫ハレテ居タ
吉良ノ知行当時四午ニ百石テ四午石以上ハ公家トサレテ居タ
カ位が高クテ知行が低イカラ生活ハ困難テ公家ノ地位ヲ失フ
ハヤモノトシテ居タ経路モカモアツタ人デアル

裁 只今十二時が十二分前デスカ休憩レテ午後ハ正一時カラ始メ

マス。

一旦休惣ニ入り。午後一時五分雨申へ午前ニ引籠キ深作年簿
人ノ弁論ヲナス。

深作

浅野家ハ常陸五万三千石ヲ賜ツタ家柄デアル依ツテ水戸ノ大
義名分ヲ多分ニ受ケテ居ツタ。

吉良ハ賄路ニ依ルニ非ラガレハ生活が出来又有様デ皆多額ノ
賄路ヲ贈ツタ然レ浅野家ハ鯉節一箱持ツテ行ツタメケタツタ

夫レタカラ賄路が無イ為メ儀式モセズ浅野家へ当リ敬ラレタ
儀式ノ為メノ御寺ノ墨替へニモ恥ヲ受ケタ為メニ長則公ハ左

良ヲ切ツタ長則公ハ切腹浅野家ハ御家断絶トナリ大石以下義
拳ニ出タ。

然レ大石が打入レノ前夜ノ手紙ニ依ツテモ判ル通り將軍家モ
知ツテ居ラレタが黙認レタ

御老中ニモ存ゼラレ候モ何等ノ御咎メモナク見テ見ヌ振リ

知ツテ居ラレタが黙認レタ

ヲレテ居ラレタ云々ハヤツテ見口ト云フ気風ガツタ。

大義名分ノ前ニハ如何ナル法律モ屈スルコトハ無イ然レモ忠孝ノ為ニヤツタ行為ハ何者モ恐レナイカヲ天下ノ輿論ハ蒸々トシテ國体ノ精神ニ叶ツタ事ト賞揚シタ此ノ処分ニ付如何ニ罰スヘキカニ付此時幕府ハ利害關係無キ者ハ処分ニ及対シタ親戚關係者ハ罰スト言ツタ

將軍モ大石以下ヲ罰スル氣ニナレナク寺社奉行所奉行其他ニ相讓シタ十四ノ寺社奉行ハ將軍家ニ意見ヲ立テ從而長御ヲトナツタ行ツタ事ハ騷擾罪デアアルが日本主義ガ抬頭シテ居タカラデアアル。將軍ハ上野宮様ニ御願ヒシタガ出来ナカツタ御言葉ガナイ為メ罰シタ

本件被告ノ行為モ正道デハナイが天道デアアル

明治大帝モ明治元年東京へ御出テノ折義士ノ墓へ勅使ヲ使ハレ給フタ